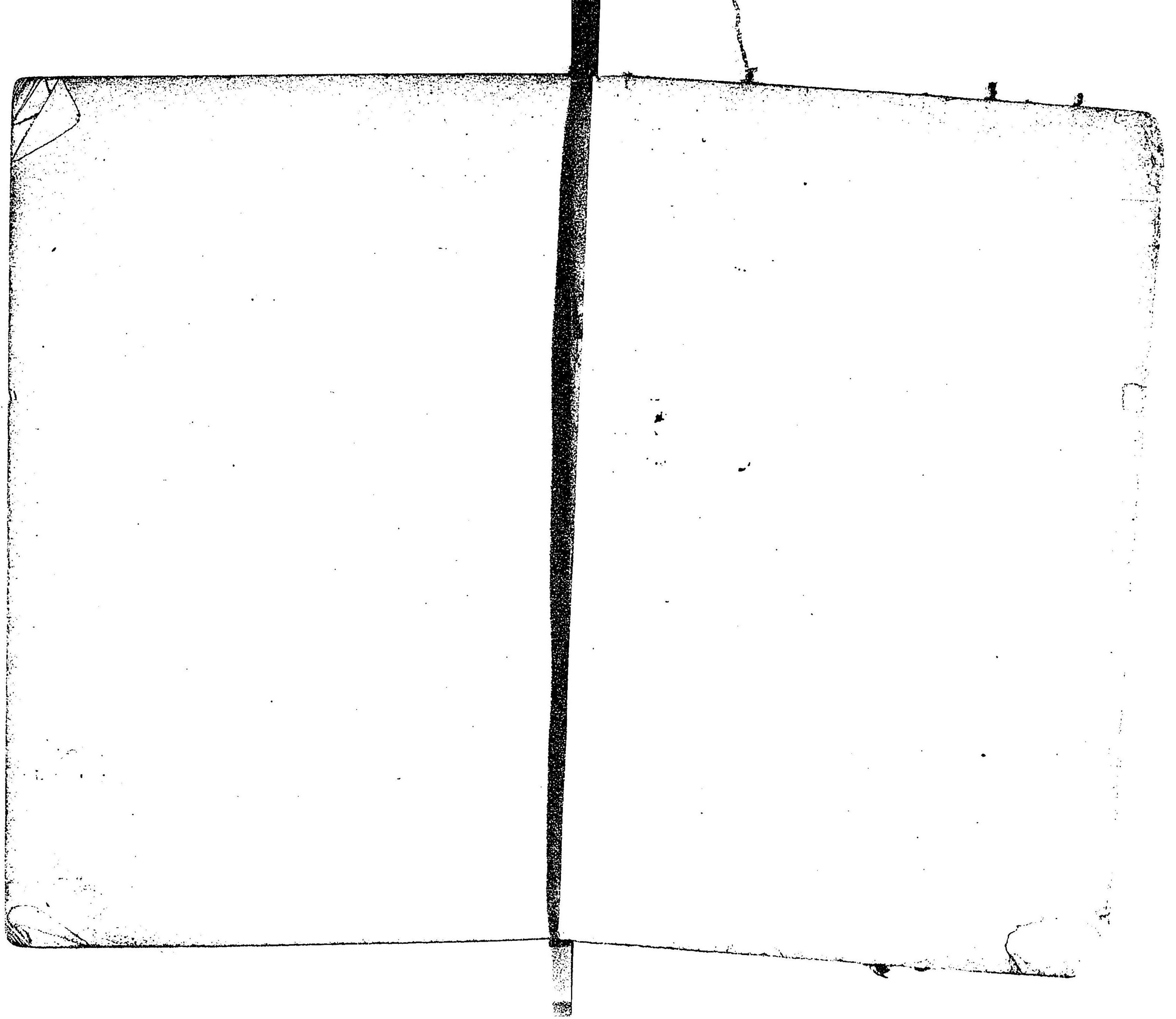




94





俳句資料
解釋

內藤 鳴雪 題句
高濱 虛子 序文
青嵐 著



明治
40 4 17
丙午



21.0

1000

1000

1000

1000

序

お経では大概なものが佛様になつて出て来て居るのに一寸驚く。たとへば、硯佛、筆佛、ラムブ佛、炭取佛、藥罐佛といつたやうに手當り次第のものが皆佛様になつてゐるらしい。併し草木國土悉皆成佛とか、一切衆生悉有佛性とかいふのが本來の教義であつて見れば、炭取佛、藥罐佛にも不思議は無いわけだ。俳句も亦似たもので、俳句の教義からゆくと何でも取つて材料とせられぬことは無い、よく引合に出る糞小便をも使ひやうによれば美化される。歌や詩などが略極まつた範圍内に跼蹐して居る

時に俳句は獨り虚空を驅けつて手當り次第に何でも御座れた。こゝがお經の炭取佛、藥罐佛の教義とよく似て居るところだ。此書は其手當り次第の材料のうちで初學のものにはわかりにくい類を抜き出して注釋を加へたものだ。手近いところの南無阿彌陀佛ですます人には無用の書であらうが、華嚴、法華とそろく佛教辭典と首引の必要を認める人には亦此書を有用の書として推薦せねばなるまい。

丁未二月

虚子記

凡例

古今の俳句中には、歴史上の人物を詠し、或は和漢の故事雅言を引用し、或は地理上の名所舊蹟を探り、山川湖海に題し、或は神祇巨刹を擇み、殿樓臺閣の迹を訪ひ、或は飛禽蟲介の奇を探りたるもの少しとせず、是故に、其事物の閱歷を詳にし、其由來を明にし、其所在を索め、其光景の一斑を知悉するに

ありされは、句意を翫味するに當り、往々隔靴の感なき能はず、隨て俳事止に於ける興趣を十分に發揮し難き而已ならず、古今の佛人が句材の撰擇に就て、如何に意を用ひたる歟を知ることを得ず、斯道研鑽の爲聊か惜しむ所ならずんはあらず。是に於て本書の編纂を試みたりと雖も、素と是れ淺學寡聞なる余と感を同しくする

初學者の爲にしたるに過ぎず、斯道の造詣者に在りては、遼東の豚たること復た言ふを要せず、唯其足らざる所を補ひ、其誤れる所を正したまはらは幸甚。

書中の事物に關する例句は、本書に採録せしもの外、尙多く存在するものあれど、本書は事物の解釋を主とし、例句を客とせしに因り、悉く之を網羅せさりし所以なり、讀

者諒焉。

明治四十年二月

青嵐識

俳句資料解釋目次

第一門 人物

第一部 本邦ノ人士

德	貞	人	仲	曾	嵐	黑	秀	範	盛
本	宗	磨	磨	良	雪	主	衛	賴	遠
守	頓	喜	宗	素	丈	藤	兼	吉	惟
敏	阿	撰	鑑	堂	艸	太	平	次	茂
丈	能	貫	宗	路	空	支	景	仁	元
山	因	之	祇	通	也	倉	政	齋	信
公	兼	業	守	惟	實	平	蒲	文	光
任	好	平	武	然	方	王	者	覺	琳

烏佛師 又平 清十郎 蓮生坊
 似雲 清輔 任口 覺阿公
 徹書記 長田忠致 憲清 長明
 藤房 運慶 光茂 來山
 行基 尊圓親王 司馬江漢 元政
 夢窓國師 大雅 光悅 宗信

女性ノ部

三五

佛御前 赤染衛門 伊勢 小督
 赫夜姬 雪信 山吹 巴督
 網夕霧 阿傳 虎上
 七小町 いぬき 清原女 紫の上
 明智の妻 百萬 美福門院

第二類 支那ノ人士(其他)

四五

許由 阮箴 李敦 王東坡
 介子推 花和尚 王敦 東坡
 許由 阮箴 李敦 王東坡

曾子 顏淵 老聃 徐福 莊子
 三皇 五帝 柳下惠 孟嘗君 伯牙
 羲之 柳下惠 孟嘗君 伯牙
 淵明 五柳先生 神農 盧如
 猗頓 陶朱 劉阮 廬如
 寒山 拾得 樊川 郭橐駝
 燕丹 屈子 三閭大夫 子稷
 范叔 毛遂 王維 馬路
 龍陽君 蘇氏兄弟 王維 馬路
 老萊子 郭巨 白樂天 蘇武
 宋玉 墨子 鮑叔 蘇武
 趙括 淮南王 鮑叔 蘇武

女性ノ部

七〇

李夫人 靈照女 趙飛燕 二喬
 褒姒 昭君 西施 楊氏之女
 班婕妤 卓文君 西施 楊氏之女

第二門 人倫

小冠者	豫陽太守	手だれ者	まれ人	猛者	大原女	大徳彌	沙彌露母	暮露母	漂母	梓子	青女房	采女
阿古	大徳	那須七騎	かたうど	番太郎	遊利行	舍利師	律法師	弱法師	くゞつ	うなゐ	たらちれ	命婦
宮奴	浅妻	八平氏	六波羅禿	さつを	甲賀衆	勾當	優夷	鞍打	阿古久曾	待女郎	てこな	女孀
物くさ者	乙の君	シテ、ワキ	をり居の君	番鍛冶	石鍛冶女	優婆塞	放下師	御子良子	むかひ腹	わきもこ	女講	

第三門 動物

九三

此守	うぶ	河鹿	錢龜	忘れ貝	鮠	鱒	思ひ羽	椋鳥	鳩	鳧	麩
駒鳥	懸巢	あぢむら	さしれ蟹	帆立貝	鮎	いさな	語鼠	風鳥	都鳥	猿子	小男鹿
線毛龜	樞鳥	百千鳥	笹蜘蛛	とこぶし	鮎	鮪	めじか	菊戴	箱鳥	佛法僧	篋籠
金龜子	かくぶつ	松むしり	蛾	胴龜	うつせ貝	ぎと	氷魚	ばか鳥	呼子鳥	沼太郎	かるの子

第四門 植物

菩提樹
莖
檜
から松
懸
苡

一〇九

支那ノ部……………一五二

瀟湘 易水 滄浪 函谷關
虎溪 虞芮 茵水 滄浪
邯鄲 臨邛 章臺 燕趙
長沙 桃源 五湖 蘇州
洞庭 茂陵 五陵 蘇州

第六門 山嶽、丘谷……………一六一

朝熊山 鞍馬山 葛城山 生駒山
鈴鹿山 秩父山 筑波山 俱利伽羅山
喜撰岳 武庫山 淺香山 男海山
笠取山 嵐山 鋸香山 東海山
比良岳 摩耶山 香具山 名古屋山
西向山 奈良坂 宇津山 比叡山
手向山 御影山 朝日山 比叡山
小鹽山 姨捨山 稻荷山

烏部野 糺の森 大峯 八鬼尾谷
双ヶ岡 逢坂 日の岡 鹿ヶ谷
談合谷 老の坂 道灌山 桃山
神路山 三上山 有王山 善峰
鷹ヶ峰 四明ヶ岳 音羽山
あだし野 おどろ野 尾上野
すぐる野 しめ野

第七門 河湖、海濱……………一八五

最上川 佐保川 堀川 紙屋川
十津川 飛鳥川 横田川 狩野川
雄上川 大堰川 桂川 大井川
鳴の海 余吾湖 鏡池 清瀧
玉川 多摩川 佐野の渡 神泉苑
四ッ橋 高瀬川 龍の清水 加茂川

第八門 建築物

木津川 蟬の小川 宇治川 鳴瀬
 白川 打出の濱 奈古濱 志賀の浦
 由井ヶ濱 加田の浦 象瀉 須磨の浦
 明石 こよろぎ磯 袖ヶ浦 與謝の海
 七里ヶ濱 三保の浦 伊良古崎 經ヶ崎
 巨椋池 長池 佃島 四十島
 (附記)

せしらぎ さいら波 濠 片男波 こもり江
 有磯海 遊水

第一類 神社

貴布禰社 多賀社 粟島堂 榛名社
 龍田姫 佐保姫 山姫 神の子
 葉守の神 阡陌の神 松尾社 いもの神
 野の宮 北野社 河伯 城南神

第二類 寺院

木母寺 法隆寺 平等院 誓願寺
 初瀬寺 六阿彌陀 五台山 等持院
 東海寺 空也寺 瑞巖寺 双林寺
 高臺寺 妓王寺 戀塚 耳塚
 鞍馬寺 高觀音 印金堂 東福寺
 靈山 圓覺寺 相國寺 清閑寺
 子安地藏 寶林寺 長樂寺 國分寺
 仁和寺 鶴林寺 興聖寺 寂光院
 一心寺 建仁寺 東大寺 園城寺
 彌勒堂 百萬遍 南禪寺 光堂
 太山寺 浮御堂 智恩院 勸修寺
 平内堂 天龍寺 小督塚 鬼子母神
 双林塔 六角堂 大德寺

第三類 樓閣、亭舎

詩仙堂 木の丸殿 大悲閣 羅生門

勸學院 鴻鶴館 華清宮 南大門 垣 木舞の竹 瀧口 ませ垣 川原院 也阿彌

縫殿 梨壺 楚臺 正木垣 攝上ヶ城 まひら戸 埴生の家 穂屋 おばしま 左阿彌

染殿 阿字門 黃鶴樓 田舎間 妻戸 蔀家 三軒家 石陣 落柿舎 長酢亭

都督府樓 日の御門 浮ふ瀬 京間 狩倉 かい屋 慶雲宮 藥欄 時雨亭 三間廟

第九門 古語、雅言（いろは順）……………二四八

いとしく
いまそかり
はつ

いでそよ
はら
こ

いたいけ
はしたなき
にが

いわけなし
はて
ほまち

まうく
おろく
わがねる
かごと
よと
たすまい
そばゆ
つけさし
ねびまさる
なれ
むつ
うら

ほだし
おごめく
わびしら
かくるふ
か
たどくし
そよ
つや
などか
なまなか
うつ
うたて

とばかり
おぞまし
かしがまし
かに
かね言
たまふ
そやす
ねまる
な
らうたし
うつるふ
うちかひ
やたけ心
けうとさ
ふくよか
あなかま

およる
わるびれる
かち枕
からしり
よすが
たぶ
つがもなし
ねそべる
なへ
むくと
うたかた
うれたし
やらい
けらし
こもりく
あなによし

第三類 圖書、文房具……………三〇九

だんだら	宿直袋	摺衣	てら
類編	常陸帶	亂れ箱	玉櫛笥
綾間笠	眉掃	赤拍	玉味噌
あまし蓼	おせち	青さし	けんどん
折敷	掛盤	芦屋釜	根來椀
葉盤	五器	目すり鱈	乳麵
眞壺	金屈厄	ほとぎ	大牢
春曙抄	山家集	五車反古	太平記
陀羅尼	朗詠集	源氏	竹取
西廂記	百丈清規	採蓮歌	定家机
卞和璧	みなと紙	碧巖錄	孟孑
端溪の硯	玉藻集	金槐集	白氏文集
一節切	投壺	草鹿	禪鞠

第四類 樂器、遊伎……………三一七

穴一	投節	舞々	催馬樂
手古舞	磬	踏歌宴	地諷
壬生狂言	羯鼓		

第五類 舟車、漁農具……………三二二

芦分舟	片輪車	地車	指南車
轆轤	轆	離舟	蛸壺
繩	びく	豊島こざ	さむしろ

第六類 雜具……………三二五

伊豫簾	閑伽桶	酒帘	にぎて
みてぐら	垂手	曼陀羅	鞞
聯	うば玉	獨鈷	梵天
錦木			

目次終

俳句資料解釋

峯 青嵐著

第一門 人物

第一類 本邦の人士

徳本の門も過きたり薬堀 蕪村

長田徳本は參河の八醫を業とす、當時鎌倉に在りし明の醫師に就て更に其業を修め深く秘法を究めたり、家貧なりしも敢て意とせず、常に青牛に駕し、藥囊を頸に懸け貧富の別なく施藥す、其一貼の價僅に十八文に過ぎず、偶ま將軍徳川家光病に罹りし時、徳本藥を呈

して之を治す、因て幕府より厚く酬むんとするも、吾樂は十八文にて足れりとして受けず、後ち甲斐國に入り留まること數年、大に葡萄栽培の法を講じたりとぞ。

負腹の守敏も降らす早哉 燕村

天長元年大旱の際、守敏僧都上奏して雨を祈らんことを乞ふ、朝廷之を聽して祈らしめ玉ひしが、七日以内に降雨ありしも京中を潤ししのみにて洛外に及ばず、朝廷更に弘法大師をして神泉苑に雨を祈らしめ玉ひしも其効無し、弘法想ふに、是れ全く守敏が呪力を以て諸龍を水瓶中に驅り籠めしに因らんとて更に祈る所ありしかば、沛然として佳雨あるに至れり、守敏の負腹とは此に因みて云へるなり

竹の子や丈山などが鎗の鞘 其角

丈山の口が過ぎたり夕涼 燕村

丈山の庵はいつこ引板の音 史邦

石川丈山は驍勇にして武事に長じ、又詩歌を善くし茶道に通ず、大阪の役東軍に従ひ殊功を建てんとて首二級を得たれども、軍令を犯して營を出たりとて黜けらる、爾來遁世の志を抱き武門を去り、京師叡山の麓に詩仙堂を營みて閑居す、爾來書畫詩文を友として優遊閑適し、諸大名之を召せども應せず、後水尾上皇も亦其高風を嘉して召し玉へども、誓て鴨川を渡らずとて和歌を上りて辭退せしとぞ、丈山妻妾を置かず、故に嗣子無し

紫陽花や公任卿の瀧の泡 旨原

藤原公任キムタツは多才にして衆藝を綜べ、善く詩を賦し音樂に長じ最も和歌に熟す、後年其女を失ひ痛く悲みて致仕し、且剃髮せんと欲したも、子女の従はざるを恐れ、止むなく北山長谷の別荘に入り僧門に

歸す、後世にもてはやさるゝ和漢朗詠集は公の撰する所なり

貞宗も高木から出て祭哉 許 六

貞宗の事は次の頼阿の解に詳なり

とばしりし墨も頼阿の時鳥 几 董

頼阿は藤原貞宗が剃髪以後の法號にして、京師に住み書を能くし和歌に巧なり、特に足利將軍尊氏の爲めには和歌を以て厚く遇され、歌の會ある毎に與からずと云ふこと無し、常に風流を以て自ら娛み公卿と往來して優遊自適したり

能因に稻を問ふたら知らぬ顔 許 六

能因は内なかで旅する炬燵哉 希 因

能因は橋永愷ながやすの法號なり、初め肥後の進士たりしか、和歌を學び薙髪して能因と號し攝津に居れり、嘗て伊豫に遊びしに、偶ま大旱な

りしかば、人皆能因に請ふに和歌を詠して雨を祈らんことを以てす、依て一首を賦して三島神社に禱りしが、須臾にして膏雨三日に及び民大に喜ぶとあり

兼好は死ぬと云ふたに年忘 支 考

兼好の筵織りけり花盛 嵐 雪

花の幕兼好を覗く女あり 蕪 村

卜部兼好は和歌に通じ書を善くす、後宇多帝に仕へて寵あり、帝崩御の後髪を剃り郷里に歸り歌を詠じ自悞む、後世にもてはやさるゝ徒然艸は其著はす所たり、兼好嘗て高師直の爲に書を作りて、鹽谷高貞の妻を挑ましめたるも事成らず、師直怒りて之と絶つに至りしとの説あり、是を以て論者往々兼好を議するものあれども、果して艶書を作りしや否詳ならず

人麿の雲へも近し年の奥

鬼貫

人丸は烏帽子芭蕉は頭巾にて

子規

柿本人麿は持統文武の二帝に仕へ和歌を作るに妙なり、屢々諸皇子の駕に陪し、諸國に遊び詠歌せしもの多し、後世は歌聖として尊崇さる

茶の花に喜撰が歌は無かりけり

几董

喜撰は桓武帝の裔なりと云ふ、和歌を善くし宇治山に居れり、長壽を求め穀を避け餌を服し、或る日雲に乗り去りて其終る所を知らずと云ふ、和歌の世に残れるもの只一首のみ

貫之が舟の灯に寄る千鳥哉

几董

紀貫之は書を善くし又和歌に長ず、故に和歌の祖宗とす、後世歌仙を稱するや、必ず指を貫之に屈し、之を柿本人麿に配す、世に知ら

れたる土佐日記は任に土佐に赴き京に歸る際の紀行なり

年越や唯業平の御袖引

其角

業平に時雨の歌はなかりけり

道彦

在原業平は阿保親王の第五子なり、風采優美にして和歌を善くす、世稱して在五中將とも云ふ、嘗て武藏國に遊び、隅田川に至り水鳥の名を問ひしに、都鳥なりとの答を聞き、乃ち……名にし負はゞいざこと問はん都鳥云々の一首を詠す、後世傳へて絶唱とす

仲麿の魂祭りせん今日の月

蕪村

仲丸は安部仲麿のこと、嘗て留學生となりて唐に赴きしが、其歸るさ途中風雨に逢ふて我國に達すること能はず、再び唐に引返したれど、日本を慕ふの餘り——天の原ふりさけ見れば春日なる——云々の歌を詠せしなり

宗鑑に葛水賜ふ大臣哉
宗鑑が竹の挽歌を蚊遣哉
宗鑑の生芋かぢる野分哉

燕村
几董
子規

宗鑑は姓を山崎と稱す、近江の人にして將軍足利義尙の臣なりしが、主君戦死の後は剃髪して武門を去り、一休禪師の風を慕ひ、風流三昧にて世を終れり、其句調は滑稽放膽なるもの多し

毘宗祇池に蓮ある類ひ哉
素堂

よき蒲團宗祇とめたる嬉しさよ
燕村

祇や鑑や花に香炷かん草むしろ
同

時鳥宗祇の質の流れ哉
青人

宗祇法師は紀州の産なり、性風流を好みて和歌又連歌を善くし旅行を樂む、後世俳門の祖として稱せらる

守武の水涕落す火桶哉
几董

守武は伊勢内宮の神官で姓を荒木田と稱す、山崎宗鑑と名を等ふして俳諧の鼻祖と仰がるゝ人なり

貝焼や曾良が故郷のおろ覺
長翠

曾良は蕉翁の高弟なり、初め蕉翁に隨行して奥州に遊び、薪水の勞を助けしが、翁も其志の篤きを感じ、薙髪せしめて通稱總五郎を改め、宗悟の名を與へたりと云ふ、其師弟間の親厚なりしを知るべし

富士晴れよ山口素堂後の月
白雄

素堂は甲斐の人、後ち江戸に來りて本所に住む、俳諧を季吟に學び常に芭蕉と交れり、當時の俳人中にて和漢の書に通ずること素堂に及ぶものなし、人あり妻を娶らんことを勸むるも聞かず、是れ老母の意に違ふことあらんを恐れてなり、天性至孝を以て聞ゆ

時鳥路通はもとの乞食哉 几 董

路通は浪華の人なるも氏名詳ならず、少き時放蕩の爲産を失ひ、零落して乞食となり芭蕉に従ひて俳事を修めしが、翁の旨に忤らふことありて破門されしも、後ち翁の臨終に際して宥されたり

花芒こゝに惟然か行燈哉 樗 良

木枕に惟然泣く夜の長さ哉 子 規

惟然は美濃國關ヶ原の人なり、初めは富有なりしも後ち貧に陥り、行脚僧となりて破笠短褐に身を委ね、飄然として諸國を流浪し、頗る奇磊の行ひ多し

嵐雪と蒲團引合ふ佗寢哉 蕪 村

嵐雪は淡路の人なり、江戸に來りて新庄侯又は井上侯に仕へしも、風雅の道に志して隱遁す、其屋舎を去る時、衣服刀劍調度一切を遺

して携帶せざりしとぞ、斯くて俳諧に専念し蕉翁の門に遊ぶ、翁大に親愛し、其角と嵐雪とは我家の桃櫻なりと云へり、其作る所の句は概ね温藉にして和平のもの多し

丈艸が宿や梅待つ小摺古木 乙 二

丈艸が脛の長さよ置炬燵 四方太

丈艸は尾張國犬山の城主成瀬氏の臣なり、繼母の生みたる弟に家を譲らんとて、自ら右指に傷つけ、刀を執り難しとの辭柄を設けて出家し、禪に入り専ら俳事に遊ぶ、其人となり厭世的なるを以て、句も亦禪味を含むもの多し

乾鮭も空也の瘦も寒の内 芭 蕉

冬瓜汁空也の瘦を願ひけり 白 雄

空也上人は延喜帝の皇子なりしも、塵外無爲の志を抱き、難行苦行

を積み十二月十三日其邸を出で、此日を以て吾が命日にせよとて、門弟に云ひ遺こし置れしに因り、其日を以て空也忌と唱ふるに至れり、今日世に残れる空也念佛鉢叩も亦上人の作にして、即ち鉢叩の始祖たる人なり、一説には上人の鞍馬山麓に閑居されし際、鹿の來馴れしものありしが、平定盛獵を好みて其鹿を射たり、上人甚だ之を悼まれしかば、定盛も懺悔して上人の法門に歸依し、優婆塞となり瓢を叩きて上人の作りし法曲を唱へ、寒夜市中を徘徊せしが、即ち鉢叩きの始めなりと云へり

實方の長櫃通る夏野哉 蕪村

藤原實方は一條帝に仕へ、和歌に長じ才名ありしも、嘗て禁中にて行成と争ひし爲、奥州に左遷され(名所舊迹の笠島の部を見るべし)て歿す、後ち其祠を加茂の橋本に設く、在原業平を祀れる岩本の祠と並び稱せられ、後

世和歌を學ぶ者、毎に此兩祠に祈願を籠ると云ふ

時鳥黒主か歌の姿ならん 樽良

大友黒主は近江の人にて大友郷に居りし故に姓とす、和歌を善くするを以て顯はれ、郡の大領となり従八位上に叙せらる、論者によりては、黒主の歌を喜ばず、蓋し歌に逸興あれども體鄙しく、宛も田夫が花前にやすらふが如しと云ふに在り

秋寒し藤太が鏑ひゞく時 蕪村
藏開俵藤太が俵哉 正九

藤太は俵藤太秀郷のことにて、昔し江州の三上山に大なる百足虫の栖み居りしを、秀郷が龍神の宣托を受け、鏑矢にて射殺したりとの傳説あり

支倉が羅馬姿や虫拂 桃家

支倉六右衛門常長は伊達政宗の臣にて常に耶蘇教を信せり、慶長十八年政宗の命を奉じて、呂宋、西班牙、羅馬の三國に使い八年を経て還れり

稻妻や平親王が夜の宴 破 笛

平親王は平將門の別稱なり、初め相馬小次郎と稱し勇悍にして騎射に長ず、攝政藤原忠平に仕へ、其推舉に依りて檢非違使たらんことを請ひしも、忠平顧みざりしかば、不平怨恨の極み下總に奔り、近國を侵掠して武を張り、後ち終に不軌を企て偽宮を下總の猿島に置き、大臣以下文武百官を設けしも、後ち秀郷と貞盛との爲に敗られて死す

蝙蝠や秀衡殿の油さし 乙 二

秀衡が館に率くや牛の楯 碧梧桐

藤原秀衡は陸奥國出羽の領主たり、沈毅にして度量あり、平氏亡びし後も一方に割據して頼朝に款を通せず、後ち義經の來り投するや、之を迎へて禮接甚だ篤し、頼朝之を責むれども唯單に異圖なきを謝するのみ、而かも義經を奉じて變らざりしと

兼平の塚を案山子の矢先哉 子 規

今井兼平は木曾義仲の臣にて四天王の一人なり、義仲粟津に敗れし時、兼平潔く自殺を勧め、自ら義仲に代り、追ひ來る敵兵を遮りて戦死せり

景政が片目を拾ふ田螺哉 其 角

景政は姓を鎌倉、名を權五郎と稱し、源義家に仕へ勇猛を以て名あり、年十六の時、敵の矢に右眼を射らる、景政大に恚り矢を抜かずして敵を急追し終に殺す、後ち歸りて矢を抜かんとするも抜けざり

しかば、戦友某止むなく足を景政の顔に踏みかけ、両手もて矢を抜取りしに、景政は却て其無禮を憤り、戦友をして陳謝せしめたりと、
(武士の面に土足をか) 其勇想ふべし

袴着や蒲の冠者が幼な顔
手負猪 範頼が墓倒しけり
霧月

蒲の冠者は即ち範頼の別稱にして源頼朝の弟なり、源氏が平家を討つに當り、畿内西海道に歴戦して軍功を建つること多し、而かも頼朝は其異志あるを疑ふこと深かりければ、範頼再三誓文を草して異志なきを表し、も、頼朝の意終に解けず、伊豆の修禪寺に拘置す、範頼の臣之を憤りて兵を挙げしかば、梶原景時之を機とし範頼を殺さんことを勧め、終に修禪寺を圍む、事不意に出でしかば範頼甲を着くる暇なく、矢を放ちて敵數人を殺し、火をかけて死す

短夜を吉次が冠者に名残哉
暖き吉次が宿や子燈心
小判賣る吉次も出たり年の市
其角
座志
泰人

吉次とは吉次信高とて京都三條の豪商で、毎年多くの貨物を運びて奥州へ下る時、冠者(牛若丸後)に逢ふて厚く之を遇し、道に熊坂長範を撃ちしとは謠曲に見ゆ

仁齋の炬燵に袴冬籠
召波

伊藤仁齋は京都の人にして一世の大儒なりき、家貧なるも居常平然たり、世の毀譽固より意に介せず、著書頗る多し、年漸く十一才なる頃よりして、詩文を草するに、其用語既に非凡なりしが、長ずるに及び果して學徳兼ね備はり名聲日に高し、諸侯幣を厚ふして聘するも應せず、孜孜として數千の門下生を訓育す、當時京師を過る者

は、其就て學ぶと學ばざるとを問はず、刺を通じて來謁する者、日に絶えざりしと云ふ、赤穂の義臣大石良雄の如きも亦聽講者の一人たりしなり

茶の花に文覺のやうな庵主哉

召波

盛遠がしやつ面たゝく霞哉

一茶

遠藤盛遠は軀幹偉大にして驕悍且つ武藝に精し、十九歳の時誤りて渡の妻袈裟を殺し、悔恨して髪を剃り文覺と稱す、爾來諸國の飛泉に浴し寒林に臥し勸修大に勉む、父母の冥福を祈るため淨財勸化を乞はんとて、一日禁中に入り亂暴して伊豆に流さる、その地にて偶ま頼朝に會ひしかば、竊に福原に赴き平氏を討つべき院宣を受て復た伊豆に歸り、頼朝を説きて神護寺の爲に丹波播磨高知の膏腴地十三箇所を寄附せんとの願文を書かすめ、然る後右の院宣を頼朝に渡

して兵を擧げしむ、資性傲狠老いて尙改まらず、天子廢立の事を謀り佐渡に流されしも、尙朝政を罵りて止まず、終に食せずして死す年八十

惟茂の眠るも早き紅葉哉

蓮之

惟茂將軍は戸隱山にて妖鬼を退治したるを以て世に知らる、事は謠曲紅葉狩に出づ、即ち維茂が紅葉狩の道にて貴女に逢ひ、酒を侷められてまどろみしが、夢中に神の告を蒙りて貴女に化けたる惡鬼を討ちしとあり

元信が三十四五の牡丹哉

大江丸

元信は狩野氏の第二世にして世に古法眼と稱す、十歳の頃より畫を以て足利義政に近侍し奇童の名を博す、土佐光信、釋雪舟、狩野元信を以て本朝畫家の三傑とす

光琳が千鳥鳴くなり古團扇 士 朗

光琳は尾形氏、京師の人にて後ち江戸に住す、初め狩野派を學び又土佐を修め、別に一家風を成す、即ち其畫く所の花鳥草木鳥獸山水悉く金銀泥を交へて彩色す、水墨にて畫く時も尙ほ畫中に金泥を點して意表の趣を成す

其昔寒き思ひや鳥佛師 虚子

鳥佛師は聖武天皇時代の彫刻師で姓は鞍作と云へりとぞ

又平に逢ふや御室の花盛 蕪村

又平の畫も拔出で、踊哉 几董

又平は岩佐又兵衛のこと、浮世繪の始祖たるがゆるる世に浮世又兵衛とも云ふ、其畫く所、當時の美人歌妓など遊興の戲畫を作るに巧みにして、彩色濃艶人の耳目を惹き、普く其美を稱せらる、一説に又

兵衛は其名ありて實は其人無しと、果して然るや未詳

繪團扇のそれも清十郎にお夏哉 蕪村

清十郎は姫路の商家の雇人なり、偶ま主家の女お夏と云へると情交ありしが、主家の金を偷みたりとの冤罪により、死刑に處せられしため、お夏は深く嘆き悲み、終に尼となつて世を捨つ、當時其噂高く戲曲演劇等に脚色して、諸國に流行盛んなりしと

蓮生は歌はよまぬを虫拂 其角

秋風や蓮生坊が馬の尻 一茶

鈍豆や蓮生坊が庵の垣 三四

蓮生と云へるは宇都宮と熊谷との二人あり、而して其二人の事迹を知らざれば句の意も解し難きことあり、故に左に擧ぐ

熊谷蓮生坊は直實のこと、源頼朝に従ひて屢々武功を立てしが、後

ち久下某と領地の界を争ひしを、頼朝自ら裁決して直實を曲とす、直實大に憤りて曰く、是れ梶原景時の奸策に出づと雖も我復た君に仕へずとて出奔す、頼朝處々に人を派して之を留むれども従はず、終に京師に入り新黒谷の法然上人の弟子となり蓮生と改む、後ち鎌倉に到り兵法を頼朝に説く、聽く者皆感賞す、頼朝更に其留まらんことを勸むるも、聽かずして辭し去れりと

今一人の蓮生は源實朝の家臣にて宇都宮頼綱と云へり、人の爲に讒せられて謀叛の心ありと訴へらる、頼綱其二心なきを誓ひて終に法然上人の門に入り、薙髮して實信坊蓮正と改む、同日に出家せし郎黨六十餘人ありしと、頼綱は藤原爲家卿の高弟にして和歌をよくせしとぞ、故に前者は武を以て鳴り、後者は文を以て顯はる、其角の句の如きは兩者を對照して始めて味あり

茸狩や似雲が鍋の煮ゆるうち

蕪村

似雲は享保年間に安藝の廣島に住みし歌人なり、後ち靈元上皇の召に應じて出仕し、晩年には大堰川のほとり天龍寺の境内に草庵を結びしとあり

清輔は花にも俗を頭巾哉

蕪村

藤原清輔は俊成、西行等と並び稱すべき著名の歌人にて、二條天皇の勅を奉じ、續詞花集を撰みし人なり、初め官位の卑かりしを憾み、和歌を詠じて不遇沈滞の意を寓せしに、鳥羽上皇之を憐み從五位を授け玉ひしとぞ

任口に白き團扇をまゐらせん

蕪村

任口は元祿年間伏見西岸寺三代目の住職にて、寶譽と號し俳事に遊ひし僧なり

杉なくて松ひやゝかに覺阿公

碧梧桐

覺阿公は大江廣元の諡號にて、廣元は源頼朝の政務を輔けて大に力あり、蓋し博く文史に涉獵し政事に通達せしに因り、頼朝の文憲は廣元の起草に係るもの多く、又籌略に富み朝事に諳練せしがゆゑ、事ある毎に鎌倉と京師との間を來往し能く之を調停せり、頼朝が武威を以て天下に號令するを得たりしは、廣元の功に依ること多し

徹書記のゆかりの宿や魂祭

蕪村

徹書記は名は正徹、字は清岩と稱し、應安年間の人にて、東福寺の書記たりしゆゑ徹書記と云ふ、嘗て一首の歌の爲に罪を得、一首の歌によりて其罪を許されしとの奇話あり、そは|||なかく|||に見ぬ唐土の鳥も來じ桐の葉落せ秋の夜|||と云へる歌にて、單に月を賞觀する意なりしを、偶ま讒者ありて鳳凰來儀梧桐生とは聖代の

祥瑞なるに、斯る目出たき鳥も來らずと詠せしは、聖代を訛譏せしなりと奏し、かば、爲に勅勘を蒙り美濃國に流謫されしが、其翌年の孟蘭盆會に際し|||なかく|||に無き魂ならば故郷に還らんものを今日の今宵に|||と詠じ、圖らずも叡聞に達し、不愍の者よとありて京へ召し還されしとぞ

時雨るゝや長田が館の風呂時分

蕪村

長田莊司忠致は、尾張國野間に住めり、源義朝が平家の軍と戦ひ敗れて、關東に潜行せんとする時、長田の館に一宿を乞はんとす、義朝の從臣は長田が心底の頼む可らざるを注意せしも、義朝聽かずして到る、長田之を遇すること最も懇切にして、而かも之を殺害せんと欲し、浴室に壯士二人を伏す、然るに義朝の侍臣金王、浴室に到りて主君を護る、三人の壯士手を下すを得ず、時に義朝浴衣を召せど

も之を進むる者なし、金王待つこと久しくして、終に自ら之を携へ
來らんとため席を起つ、其間に乘じて壯士跳り出で、義朝を殺す、是
れ正月三日の夜なり

柳寒く弓は昔の憲清や 其角

憲清は西行法師のこと、豫ねて武藝に長じ韜略に通せしも、常に名
利を喜ばず遁世の志あり、嘗て親友憲親の卒かに死せしを聞き、愈
々出家の念を決したれども、朝廷其辭意を許し玉はず、一日郊外に
遊び家に歸れば、四才の女兒嬉戯して傍を離れず、憲清願ふに、我
が宿志を妨ぐるは此の愛着にありとて、涙を忍び決然床上より女兒
を蹴落し、妻子を捨て、去る、時に年二十三、且思へらく、桑門の
身には家無しとて、東西に飄遊し足迹到らざる處なし、一日鎌倉に
往き、頼朝の請に因り夜を徹して弓馬の道を説く、頼朝深く喜び、

賞するに銀製の猫兒を以てす、既にして辭し去るや、門前の兒子に
之を投げ與へたりと云ふ

長明が車に梅を上荷哉 素堂

鴨長明は、鴨社の禰宜の子なり、管絃を善くし和歌に通ず、加茂社
の社司に補せられんことを請ひしも允されず、爾後快々として樂ま
ず、禿髮して僧となり大原山に入る、後ら自己の創意を以て一室を
作る、即ち方一丈高さ七尺にして、柱楹簷廂悉く鈎鎖を以て連結し、
開闔自在なるにより、何れの處へも容易く之を運び移して住みたり
と云ふ、著書種々あるが中にて、方丈記は最も後世の傳誦する處と
なれり

藤房と正成と花一重哉 抱一

藤原藤房は後醍醐天皇に事へたる忠臣なり、元弘の亂に天皇嘗て笠

置山に難を避け玉ひし時の如きは、藤房供奉して最も苦心慘憺を極めたり、亂治まりて後ち、天皇の京師に還御ありし以來、漸く政に倦み玉ふて、便佞の徒、志を恣にし賞罰紊れ人心離れんとす、藤房屢々之を諫むれども聽かれず、因て思ふに、臣として盡すべき道は既に盡し得て餘地なしとし、漂然として北岩倉に入りて僧となる、帝驚きて之を召せども應せず、復た再び人を遣はしめ玉ひし時は、藤房既に去りて在らず、其後の消息に就ては、正史稗史ともに諸説紛々として定かならず

灌佛や雲慶閑に刻みけん 召 波

雲慶は運慶の誤ならん、運慶は有名なる彫佛師にして、巨刹の佛體木像等、其作に成るもの多し、初め京都に在りしも、後ち鎌倉に移れり、所謂鎌倉佛師の祖たるなり、時代は後鳥羽天皇より順徳天皇

まで頃の人ならんと云ふ

光茂が膠禿げたる火桶哉 召 波

一允光茂は高倉帝時代の人にて、善く筆樂を吹奏するを以て名あり、朝廷之を召せとも仕へず、或る日海岸を旅行せし時賊に逢ふて脅かさる、光茂曰く我れ平素音律を嗜む、願くば死に臨みて一曲を奏せん然る後我を殺せと、徐ろに筆樂を出して吹く、其音悲哀悽慘にして腸を斷つの妙あり、賊深く之に感じて放ち去らしめたりと

來山は人形に年を惜みけり 化 蛹

來山は、小西行長の後裔にて大阪に住みし俳人なり、童幼の頃より既に俊秀の譽れ高く、二十歳にして斯道の宗匠と仰かるゝに至れり、家貧にして酒を愛し、生涯妻を娶らず常に女人形を購ひて坐右に置けり、其所謂女人形の記なるものは、後世に喧傳する所たり

菊植て行基住みけん茶碗坂

木丹亭

行基は聖武帝時代の名僧にして、年少の頃より穎悟俊慧の聞えあり、十五歳の時出家し、日を追ふて其名四方に振ふ、畿内に於て佛閣を創建すること、四十九箇所の多きに及びしと云ふ、其到る處に法を説くや、耕す者は耒耜を息め、織る者は杼を投して參禮せざるはなし、或る日、里人の宴を張るに會ふ、少壯の徒、戯に魚膾を行基に與ふ、行基之を喫し了りて池中に吐けば、忽ち小魚に化して游泳し去れり、里人大に驚異したりとの奇談あり、聖武帝特に行基を敬重したまひ、擢んで、大僧正となし玉へり

尊圓親王の御筆拜む筆始

觀魚

尊圓親王は、伏見天皇第六の皇子にて、京都青蓮院第十七世の門主たり、初め世尊寺中將行房に就て書法を修め、後ち上代の筆意を參酌し、遂に豐美圓勁の容姿を具へたる一流を創む、是れ御家流の元祖なり、爾後青蓮院の門主は、歷代其筆法の蘊奥を極め、聯綿として繼承久しきに及べり

繪屏風や司馬江漢か秋の海

月兔

司馬江漢は本邦に於ける洋畫の率先家たり、江漢の頃までは洋畫未だ開けざりしが、江漢始めて長崎に赴き蘭人に學び、終に油繪及び銅板畫を能くするに至れり、嘗て錦帶橋の景を油畫に描き、淺草觀音堂に掲げしに、人皆之を奇とし、觀る者日々堵の如くなりしも、或る人、清淨なる伽藍に南蕃の畫を掲ぐるは不可なりと難せしに因り終に之を撤し去れり、江漢は文政元年七十二歳にして歿す

竹植て元政坊を思ふ哉

曉臺

元政は一に幻生又顯星とも書す、平安の人にて幼少より俊秀の聞え

あり、俗稱を石井吉兵衛と云ひ、井伊直孝に仕へしも疾くに出家の志あり、年廿五の時、直孝に従ひ江戸に來りしが、偶ま芳原三浦屋の二代目高尾に親しみ、偕老の契を結びしも、高尾故ありて自殺せしかば、益々人生の無常を悟り、病と稱し致仕して僧となり深草に住む、學博く行正しく、持律守戒最も嚴にして、常に袈裟を解さしことなく、世人深く敬信して、如來の化身と云へる程なり、著書亦多し

竹に清水夢窓國師か引殘し

青々々

夢窓國師は、名を疎石と稱し伊勢の人なり、幼少より俊慧聰明なりしか、母を失ふて出家し、遂に學德兼備の高僧となれり、後醍醐天皇最も敬信し、召して南禪に住ましめ、特に國師の號を賜へり、資性温雅にして自然に物を感じしむる力あり、故に上王公より下匹夫に

至るまで、一たび其音容に接すれば、皆欽仰せざる者無かりしとぞ、亦以て德望の高かりしを想ふべし

西行と大雅と語る臚哉

鱸江

池野大雅堂は京師の人なりしが、幼少より畫才ありて終に一派を成すに至れり、其畫風は奇韻に富み、粗密共に雅朴愛すべし、書も亦唐宋の古法帖を學び其妙を得たり、好みて名山大岳に遊び、圖畫の良材を搜りしと云ふ、富士百圖の如き、奇狀變態の妙を極め、古今の畫人の及ばざる所多きは、遊筈によりて得たるものありしに因らむ、性頗る恬淡にして毀譽得失を顧みず、行爲往々人の意表に出つること多し、或る夜盜賊來りて繪畫の用紙及毛氈を偷み去らんとす、大雅徐ろに之を呼び止めて曰く、汝の偷むべき物尙ほ他に在り、用紙氈布の如きは我に用ありて汝に益なし、其益なき物を措きて、他

の益ある物を携へ歸れと、其磊落無頓着なること概ね此の類なり

鷹か峯光悦住みて楮火哉 柿園

本阿彌光悦は京師の人、刀劍の鑒定家として名あり、傍ら諸藝に熟す、即ち書は一家を成して當時平安三筆の一人と呼ばれ、畫は土佐派を學びて別に逸格の韻致を有し、漆器蒔繪又は製陶の術に長す、洛北なる鷹か峰は丹波に通ずる山路にして峰嶺重層し、群盜往々行人を惱ませしが、官、其地を光悦に賜はる、光悦茲に家居するに至りて、群盜皆逃れ去りしと云ふ、光悦資性寡慾にして此處に閑居するに際し、貴品佳什は悉く親戚知友に頒布したり、後ち其の絶頂に一寺を建つ、光悦寺是なり

宗信か火取香爐に霰哉 雙兔

志野宗信は京師の人にて有名の茶人なり、又香道にも熟す、足利義

政に仕ふ、實に志野派香道の祖たり(志野は一は篠とも書す)

▲女性 の 部

散る花や佛御前か笠の上 乙 二

佛御前は加賀の人にて京都に住み白拍子の名人なり、或日平清盛の邸に伺候せしに、清盛は當時美人の聞え高き妓王を愛せしにより、佛御前を斥けて曰く、佛と稱するも神と呼ぶも、いかで妓王の艶に及ぶものあらんやとて敢て會はず、佛御前は之を恨み且耻ちらひて辭し去らんとせしかは、妓王清盛を説きて引見せしむ、因て佛御前は今様の舞曲をかなでしに、其容姿頗る麗艶秀絶なりし爲、清盛心動き之を納れて愛妾となし、漸く妓王を疎んするに至りしか、後ち妓王の失意を詠したる歌に感じ、人世榮枯盛衰のはかなさを悟り、一夕邸を脱して妓王の隠栖せる尼寺に至り、薙髮して尼となり、妓

の益ある物を携へ歸れと、其磊落無頓着なること概ね此の類なり

鷹か峯光悦住みて榑火哉 柿園

本阿彌光悦は京師の人、刀劍の鑒定家として名あり、傍ら諸藝に熟す、即ち書は一家を成して當時平安三筆の一人と呼ばれ、畫は土佐派を學びて別に逸格の韻致を有し、漆器蒔繪又は製陶の術に長す、洛北なる鷹か峰は丹波に通ずる山路にして峰嶺重層し、群盜往々行人を惱ませしが、官、其地を光悦に賜はる、光悦茲に家居するに至りて、群盜皆逃れ去りしと云ふ、光悦資性寡慾にして此處に閑居するに際し、貴品佳什は悉く親戚知友に頒布したり、後ち其の絶頂に一寺を建つ、光悦寺是なり

宗信か火取香爐に霰哉 龔兔

志野宗信は京師の人にて有名の茶人なり、又香道にも熟す、足利義

政に仕ふ、實に志野派香道の祖たり(志野は一に篠とも書す)

▲女性 の 部

散る花や佛御前か笠の上 乙 二

佛御前は加賀の人にて京都に住み白拍子の名人なり、或日平清盛の邸に伺候せしに、清盛は當時美人の聞え高き妓王を愛せしにより、佛御前を斥けて曰く、佛と稱するも神と呼ぶも、いかで妓王の艶に及ぶものあらんやとて敢て會はず、佛御前は之を恨み且耻ちらひて辭し去らんとせしかは、妓王清盛を説きて引見せしむ、因て佛御前は今様の舞曲をかなでしに、其容姿頗る麗艶秀絶なりし爲、清盛心動き之を納れて愛妾となし、漸く妓王を疎んするに至りしか、後ち妓王の失意を詠したる歌に感じ、人世榮枯盛衰のはかなきを悟り、一夕邸を脱して妓王の隱栖せる尼寺に至り、薙髮して尼となり、妓

王と共に道心堅固に世を過したりと

藪入の赤染衛門咄しける 大江丸

赤染衛門は有名の歌人にて和泉式部と名を齊ふす、後ち大江匡衡に嫁し其子嘗て病む、衛門之を憂ひ、住吉神社に和歌を捧げて祈りしかは終に癒ゆとあり、以て歌道の名家たりしを知るべし

松飾り伊勢か家買ふ人は誰 其角

賣家の伊勢か軒端や猫の戀 几董

伊勢か家は昨日賣れたり蝸牛 士朗

伊勢太輔は伊勢祭主中臣輔親の女にして和歌を善くす、紫式部、和泉式部、小式部と名を齊ふし、共に上東門院に仕へたり

茅花ぬく小督か禿いや瘦し 曉臺

こがりのつほね小督局は高倉帝の寵愛最も深かりし美人にて、特に琴曲の名手と稱

へられし人なり、未だ宮中に入らずして己が家に在りし時、平清盛の女婿たる藤原隆房と通せしが、高倉帝に召されて宮中に入るに及び、隆房は之を慕ふて憂悶し悒々として樂ます、清盛以爲らく、中宮(清盛の女)の寵衰へしも小督の爲にして、隆房の幽鬱も亦彼の爲なりとし、終に之を殺害せんと企てしかば、小督は痛く怖れ、潜かに宮中を逃れて嵯峨の片田舎の民家に身を隠しぬ、然るに高倉帝の驚き大方ならず、源仲國に命して其所在を探らしめ玉ひしが、偶ま嵯峨野の一小屋に琴の音の微妙なるをたより、終に伴ひて宮中に還れり、是より帝の寵愛いよ、切なるに従ひ、清盛の憤は益甚しく、終に小督を捕へ無理に剃髪せしめて尼となし、かは、世をはかなみて身を大堰川に投したりと

赫夜姫紙魚の行衛を覺束な 乙二

菜の花や小窓の内に赫夜姫 巢 兆

赫夜姫は垂仁帝の寵を得たる人なり

雪信か蠅うち拂ふ硯哉 蕪 村

雪信か屏風も見えつ雛祭 几 董

雪信は姓を清水と稱し探幽の姪女なり、豫ねて畫を探幽に學び其法を得たり、女流畫家中の第一と評せらる

山吹も巴も出たる田植哉 許 六

木馬始め巴山吹引添ひぬ 猿 左

山吹は木曾義仲の妾にて一名葵とも云へり、膂力衆に勝れ、巴と共に屢々勇戦して功ありしか、終に礪波山の戦に死す○巴は鞍繪とも書す、今井兼平の妹にて美にして勇あり、義仲之を寵し、一部の將として屢々武功を建つ、義仲の戦死する際も、尙隨伴して追手を撃ち退く、義仲曰く我れ死に臨むまで女子を伴ひしとありては、異日我名を累はすに至らん、汝是より去れとて強めて歸らしむ、時に年二十八、義仲死後終に尼となれり、一説には其後和田義盛か頼朝のゆるしを得て之を妻とすと云へとも眞假詳ならず

春雨や綱か袂に小提灯 蕪 村

羽織着て綱も聞く夜や川千鳥 同

綱は羅生門にて鬼の腕を切りし渡邊綱と解せしもあれと、一説には一條戻橋の柳風呂に在りし遊女なりとも云へり、句の趣味によりては後説を採るべきもの多し

夕霧より伊左さままいる師走哉 子 規

戯曲の廓文章に吉田樓に夕霧と云へる妓あり、情夫伊左衛門と親し、大江丸の作にも……吉田屋の蚊に喰はれけり伊左衛門……とあるは

即ち是なり

猫の塚お傳の塚や木下闇 子規

高橋おでんと云へるは、明治初年の頃種々の悪行を爲したる有名の毒婦にて、終に死刑に處せられしなり

むら千鳥其夜は寒し虎か許 其角

大磯の虎とし云へば、曾我十郎祐成の愛妓なりしことは、普く人口に膾炙せるにより、今更解釋する必要なきに似たれとも、此の一女子が後世の史家文藝家の好材料として、もてはやさるゝは、そも何故なるか、況して俳界に於ては五月廿八日の降雨を虎か雨と稱して詠するからは、尋常一様の歌妓にあらざりしと知るへし、因て彼れが普通輕薄的の賣女と異なり、其志操の執るへきものあるを擧げんに、當時鎌倉にて威名赫々たる和田義盛が、一日大磯に遊び、虎の家に

至りて酒宴を張り、其席に虎の侍せんことを求めしに、虎は之を辭して云ひけるやう——和田殿は飛ぶ鳥をも落さんほどの富貴の方なれど、曾我殿は見る影もなき寒浪の士なり、されど妾は貴賤貧富によりて媚を賣ることを二三にせずと——是に於て義盛も強ゆるに辭なく、終に祐成に頼りて説かしむ、虎さらばとて祐成と共に其席に侍す、義盛悦んで盃を執りて與ふるも、虎は直に其盃を義盛に返さず、必ず祐成の手を経て致したりとぞ、祐成の死後は哀慕悲嘆に暮れ、信州善光寺に赴きて尼となる、芳紀正に十九、後又大磯に歸り高寺庵に幽居し、七十の壽を以て世を終へたりと、一説に、虎の父は京師より關東に謫されし大納言實基卿なりしとあり、其氣品高尚にして節操の堅固なりしも亦宜ならんか

名月や湖水にうかふ七小町 芭蕉

七小町とはかの有名なる美人小町の事績を、草紙洗小町、通小町、卒都婆小町、鸚鵡小町、關寺小町、清水小町、山本小町とて題して各々作爲せしものを云ふ○句の意は蘇東坡か西湖(支那の名勝)を西施(支那の美人)に比しなは、淡粧と濃沫と兩つながら相俟て宜しからんと云へる詩の意に模倣したるなり

籬の灯にいぬきか袂かゝるなり

蕪村

いぬきは實在の人名にあらずして、小説中の假名なり、即ち源氏物語中にある紫の上の召使はれし腰元の名にして、紫の上の愛したる鶯を取り遁すなど、頗るそゝかしき性質に書きなしてあるので、此句意も自ら其人に適應せるやうに見ゆ

鬼灯や清原の女の生寫し

蕪村

清原の女とは女流畫家の秀才たる狩野雪信のこと(前に出た)、齡四十にて

天和二年に歿す、落款には清原、清原女、雪信などの印を用ゆ(一書元祿十一年に歿すとあり)

紫の上も召しけり傀儡師 蓼太

紫の上と云ふは、源氏物語中の女主人公にして、即ち皇子源氏の君と云へる優しき公達に配したる佳人の名なり

月さひよ明智か妻の嘶せむ 芭蕉

明智光秀が未だ流浪の身たりし頃、客を請せんとしても其資の乏しきを啣ちしに、妻自ら黒髪を切りて、酒肴の費用をたすけしとの逸話あり

百萬も子にめぐり逢ふ踊哉 和荆

奈良に百萬と云へる女住めり、夫に死別れ、其子一人ありしを見失ひ、そを尋ねんとて狂ひ歩行きつゝ、嵯峨の大念佛に參りて、其子

にめぐり逢ひたり云々とは謠曲に見ゆる所なり

美福門院より六波羅殿へ牡丹哉

句・佛

美福門院は藤原得子のこと、得子は中納言長實の女なりしか、鳥羽上皇其美なるを聞き、宮中に納れたまひ寵幸最も厚く、從三位に進み終に后妃となり、美福門院の號を賜はれり、既にして近衛帝を生みしも、不幸にして帝崩す、時人舉な望を崇徳帝の皇子に屬し、代りて朝に立ち玉はんことを期す、然るに美福門院は之を拒むの意あり、蓋し近衛帝の病難は、崇徳帝の咒詛に因るものと察せしがゆるなり、是を以て崇徳の皇子を斥け後白河帝を立つ、崇徳帝大に望を失し、爾來相互に排擠甚しくして、終に保元の亂の起るに至りしは、全く美福門院に因りてなり

【第二類】

支那の人士(其他)

竹の聲許由の瓢まだ青し

其角

初氷許由此朝掬すれば

召波

許由は支那の隱者なり、平素手を以て水を掬ひ飲んで居たりしを、斯くては不自由ならんとて、或る人が瓢を贈りぬ、初めは之を喜び弄びたりしが、一日其瓢を樹に懸け置しに、風吹てからくと鳴りしかは、こは喧しとて復た拋棄したりと云ふ奇人なり

阮箴か三味線しばし時鳥

其角

阮箴は晋の人なり、性質磊落にして竹林の遊を共にしたる七賢の一人である、家貧なりし爲土用干の際、他家の様に衣を乾すこと能はず、因て犢鼻褌を長き竿に結び付け、之を翻して我れも亦世俗を離

るゝこと能はずとて洒落しことあり、又常に琵琶を能くし、吏となるも事務を執らずして彈琴に耽りしゆるゑ、それを其角が日本の三味線に擬したるなり

御出入りの李白を探す牡丹哉

召 波

桃の酒も李白は一斗例の如し

樽 良

李白は唐の大詩人にて、終日酒ばかり飲み世事を顧みず、玄宗帝の召したる時も、臣は酒中の仙なりと答へ、終に酒仙の名を博したる程なり、杜甫の作りし飲中八仙歌に——李白一斗酒百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙——とあるを以て知るべし

早鮮に王思は鮮を煽きけり

召 波

王思は魏の國の人にして甚だ性急なり、嘗て筆を執りて書を草する時、筆端に蠅群かりて去らず、之を追へば復た忽ち到る、此の如き

こと再三なりしかば、王思大に憤り、自ら起ちて蠅を追ふも之を獲ること能はず、遂に筆を摧きて地に抛ちたりとの逸話あり

介子推お七のやうになられけん

太 祇

介子推は晋の文公の臣なり、文公國難に遭ひて國を出奔せし時、五人の勇臣之に従ふ、介子推も亦其一人なり、文公その途中にて飢に逼りければ、子推は己れの股の肉を割きて公に與ふ、後ち文公國に歸りて國難鎮定の功により、五勇士の内四人は悉く封土の賞を受たるも、介子推獨り其賞に與からざりし爲め山中に隠る、世人其不遇を憐み、書を宮門に投して王に諷す、文公大に悟り、衆をして子推を求めしめたれど、子推隠れて出てず、遂に其山を燒きて大に求めんとしたるに、子推爲に焚死す、文公之を悔ひ其山を封して介山と名づく、後世の人、子推の高義を慕ひ、其死せし日を寒食と稱し、火

食を爲さずして深く追悼するに至れり

あざ笑ふ花和尚の聲や餛飩汁 失名

花和尚は水滸傳中の豪傑にて、初めは魯智深と云ひしも、人を殺し其罪を逃るゝため僧となれり、満身に文身いれずるせしを以て花和尚と呼びしなり、なかゝの亂暴者にて常に鐵禪杖を携へ、豪勇無双の荒法師なりきとあり

葛水や王敦を憎む女あり 几董

王敦字は處仲と云ふ、性極めて剛愎殘忍なり、或る日驕奢横暴を以て名ある王愷の許に往きて酒を飲む、席に美人あり、客に酒を侷むること行届かされば、王愷輒ち之を殺すことあり、妓甚だ懼る、然るに王敦の坐に酒盃を侷むるも、手にだも觸れずして無愛相に打捨て置き、侍妓の甚だ憂懼するさまを冷眼に看過せしほどの意地悪き人物なり

酔て吟す東坡か頭巾抜けんとす 子規

東坡は蘇軾そしやくと云へる宋の學者にして八大家の一人なり、文才非凡にして一射千里の勢ありしと云ふ、後ち王安石の布ける新政に對して反抗せし爲め貶謫されしも、而かも支那文學史上には一異彩を放つべき人物なり、晩年には東坡と云へる地に閑居し、自ら東坡居士と號し、田父野老と共に溪山の間に遊びしと云ふ

肉を買ふ曾子か母や梅白し 蝶哉

曾子は孔子門弟中の名高き人にて名を參と稱せり、平素貧困なりしゆゑ、友人の訪ひ來ることあるも、之を饗應する資なかりければ、其母自ら髪を剪りて之を賣り、其費を辨したりとの逸話あり、賢母として世に知られたる人なり

鶴さもあれ顔淵生きて千々の春 其 角

顔淵は孔子三千の門弟中で、第一流に位した賢人である、孔子の教義を最も能く會得したる人なりしも、不幸短命二十九歳にして歿せり

春風や老聃牛に乗て來る 瓢 亭

老聃は支那古代の大哲學者で世に老子と稱す、老子の周に在る時、孔子も自ら訪ひ尋ねて禮を質し、其答ふる所には大に感嘆したりとぞ、老子の主義は無爲無名を以て眼目としたるが、周の世の衰ふるを見て他に去り、終に其終る所を知らずと云ふ

雪に暮る、年よ莊子が泥の龜 樽 良

莊子も亦支那の大哲學者で老子の一派なり、孔子の學說に反對したるを以て聞ゆ、列國の王侯重く用ひんとするも、一切之を辭して仕へざりし偉人である

三皇五帝雀蛤となりにけり 瀾 水

三皇とは支那にて天皇氏、地皇氏、人皇氏を云ひ、五帝とは伏羲氏、神農氏、黃帝、帝堯、帝舜を云ふ

蓬萊に徐福と申す鼠哉 虚 子

徐福は秦の始皇の臣なりしも、秦の苛政を快しとせさりき、偶ま始皇が不老不死の仙藥を蓬萊山に求むと聞き、童男童女五百人を伴ひ、仙藥を蓬萊に求むと稱し、穀類耕具を積みて日本に移住し來りしと云ふ、本朝通鑑にも七十二年秦徐福來とあり、是實に孝靈天皇の御宇なり

伯牙ならで我も戀ふるぞ時鳥 鬼 貫

伯牙は支那の昔しに琴の名人であつた、鐘子期と交はり無二の親友

なりしが、期が死せしを痛く悲しみ、我には最早知己の友無しと嘆息し、愛翫せる琴を毀ちて復た再び彈せざりしと云ふ

鮪汁の君よ我等よ子期伯牙

蕪村

子期は前に記せる鐘子期のこと、友人伯牙の琴を聽くに、子期最も能く其意を得たり、即ち其意高山に在れば曰く、巍々乎として泰山の如しと、其志流水に在れば曰く、蕩々乎として流水の如しとせり、斯く意氣相投じたる交友なりしを以て、子期の死後は伯牙敢て琴を彈せざりしと云ふ亦宜なる哉

白團扇隣の羲之に書かれけり

大江丸

羲之は王羲之のこと、晋の人にて書に巧みなり、特に隸書は古今獨歩の名あり、支那の能書家と云へば必ず指を此人に屈す、嘗て或る大官が婿を撰まんとて、羲之の先生たる王導の許に使を遣はし、多

くの門弟を見せしめたりしに、やがて其使の歸り告ぐるやう、婿撰みの使者來れりと聞て、門弟概ね其容を改めしが、只一人隅の方に平然として腹を露出し飯を食つて居たる者ありしと、大官想ふに、さては特殊の人物ならんとて、終に吾が娘を與へたるが即ち王羲之にて、後ち果して高官に昇れり

柳にも宿り木はあり柳下惠

蕪村

柳下惠は魯の國の名高き賢人なり、或る處に獨り佗しく住み居たるに、風雨の甚しき夜、一美人來りて宿を乞ひたり、世人は柳下惠の物固きを知り、男女別有りの戒を守りて、宿を斷はりしならんと思ひたるに、何ぞ圖らん心易く宿泊を許した、然るに世人は柳下惠の賢者たるを知りて居るので、男女同宿を怪まず、却て其親切を譽めたりへたりとの逸話あり

芋煮るや孟嘗君の臺所 青嵐

孟嘗君は齊の王族の一人にて、賢明の聞え高く、平素自ら奉ずること薄くして、多くの食客を養ひ其數三千人に及びたりとぞ

罈や相如か弦の切る、時 蕪村

相如は前漢の司馬相如のこと、或る酒肆に卓文君と云へる美人が居た、相如は之に親まんと思ふて、損料借りの麗はしき車に乗り、其酒肆に往き酒を酌んで琴を鳴らした、美人之を垣間見て心動き、其夜出奔して相如の家にとりしに、案外にも相如が貧乏で、壁ばかりの荒屋に住みて居たれど、文君は志を變へず能く事へたりしが、相如は終に立身して武帝の侍従とまでに進みたり

淵明が隣あつめや生身魄 汝村

淵明名は陶潜と云ひ晋の人なり、性磊落にして酒を好み、彭澤の令

となりても、公田に稱穀(もちぎ)を多く植えしめたるが、是は醸酒の資となるゆるなり、其人となり不羈清廉にして、吾れ五斗米(俸)の爲に腰を折ること能はずとて、官職を抛つて優遊自適したり、平素琴を愛したれど、そは無弦の琴なり、人に語りて曰く、琴の趣味を知らば、必しも弦の鳴るを要せずとて、酒席にても矢張り無弦の琴を撫したりと、家清貧なりし爲、九月九日の祝日にも酒を得ずして、菊の花を摘み盃中に盈て居たりしを、王弘が見て酒を贈りたりと、又友人が其貧を濟はんとて二萬錢を贈りしに、之をしも悉く酒屋に投して仕舞ひしなど、種々逸話の多き人物なり

たんぼ、や五柳親父がしたし物 几董

五柳先生とは前記の陶淵明の別號なり、淵明其門前に五株の柳を植え、五柳先生と稱し自ら其傳を作りしに因る

歛下げて神農顔や菊の花

一 茶

神農氏は支那帝皇の始祖としたる三皇五帝の五帝中にて第二世なり始めて火食を民に教へ五穀播種の道を授け、或は百草を嘗め醫藥を究め、在位百二十年にして世を逝れりと云ふ

此蠅によくく盧生寝ぼうなり

大江丸

藥喰盧生を起す小聲哉

燕村

春の子が盧生もどきの團扇哉

一 茶

盧生は唐時代の貧生なり、或日邯鄲の市に行き旅亭に憩ひし時、呂翁なる者に遭ふ、呂翁は仙術家なりしゆゑ、盧生は訴ふるに貧苦の事情を以てしたり、時に旅亭の主人は偶ま黍を蒸し居たりしが、呂翁は一枕を取り盧生に與へて曰く、此枕に就て眠らば百事意の如くならんと、盧生之に倚りて眠る、既にして一美人を得て之と結婚し、

間もなく科擧に登第して顯官となり、或は將軍を拜して戎虜を討ち、五人の子と十餘人の孫とを得、年八十にして死するに至るまで、生涯其適意の事歴を遂行して夢覺む、而かも主人の蒸せる黍の未だ熟せざる間なりしと、之を盧生が邯鄲一炊の夢と云ふ

客は猗頓主は陶朱夷講

晚春

長崎に我れ猗頓たり柱餅

僊堂

陶朱は范蠡のこと、范蠡初め越王勾踐に仕へ、吳の國を滅ぼし會稽の耻を雪ぎ偉大なる勳功を樹つ、竊に以爲らく、大名の下には久しく居り難しと、其一族と共に海に浮び終に歸らず、姓名を變して自ら鴟夷と云ひ、海畔に耕し資産數萬を重ぬ、既にして自ら嘆して曰く、家に居ては千金を致し、官に居ては卿相に至る、是れ布衣の極なりと、悉く其財を散して知友に分てり

頓は魯の國の貧生なりしが、陶朱公の富を聞き往て其術を問ふ、朱公告けて曰く、子富まんと欲せば牧畜に従事すべしと。是に於て西河に往き、大に牛羊を猗氏の南に畜ふ、十年の間にして富、王公に擬し、名を天下に馳す、其富を舉げて悉く猗氏に與ふ、故に猗頓と並び稱す

劉阮の桃に泊るや撞木町

召波

劉阮は二人の名にて即ち劉伶と阮籍となり、共に竹林七賢の連中なり

餅花や迦葉の笑も幼な顔

言水

迦葉は釋迦の十六弟子の隨一なり、釋迦將さに娑羅双樹の間に於て涅槃に入らんとす、時に釋天華を献して末期の説法を請ふ、世尊乃ち一枝の金婆羅華を拈せしのみにて一語なし、四坐の衆其意を解す

ること能はず、獨り迦葉破顔微笑す、世尊我が意を得たりと爲し、が、爾來佛道綿々として絶えず

寒山と拾得とよる落葉搔

許六

寒山は大聖文殊菩薩の化身にて、拾得は太行普賢菩薩の化身なりと云ふ、寒山は支那の五臺山に住し、拾得は遊化の優婆塞(俗人俗體にしる者を云ふ)にして、兩人相共に親交の間柄なりしと

樊川の老見え初めぬ今年酒

青々

樊川は杜牧の號にて風流才子として名あり、最も詩を善くせし人物なり、世に喧傳せる阿房宮の賦は其作る所なり

毛虫這ふ背中をかしや郭橐駝

几董

郭は姓にて橐駝は名なり、其人の背屈曲して橐駝に似たるゆゑ此名を得たり、樹木を栽培するに巧みなりしと云ふ、其傳文章軌範に詳

なり

燕丹につらき別れや玉子酒

青々

燕丹とは支那戰國時代に於ける燕の太子丹のことを約めたる語なり
即ち燕の壯士荆軻が太子丹の内囑を受け、秦の亡命の將たる樊於期
の首と、燕の國の地圖とを秦王に捧げ、其地圖の中に劍を巻き込め
て秦王を刺さんと企てしなり、易水送別の詩に——此地別ニ燕丹ニ壯
士髮衝冠——とあるは是なり

尙くは饗けよ屈子に菊酢和

鳴雪

沙魚釣の老は屈子を見知りごし

青々

屈子とは楚の屈原のことにて、初め楚王に用ひられ、國政の大に觀
るべきものありしが、同列の大夫之を妬み、其讒誣の爲め江南に貶
せられ、後ち再び朝に立つの望みありしに、又もや讒に逢ふて斥け

らる、遂に清白の身を以ては到底濁世に居るに忍びずとて、身を汨
羅に投じて死す、唐詩に——阮湘流不盡、屈子怨何深——とある
は是なり

薔薇を挿す三閭大夫か社哉

青々

三閭大夫は前に記したる屈原の異名なり、即ち楚の王族たる昭と屈
と景と云へる三族を、屈原が管掌せしに因り、三閭大夫と呼ぶに至
りしなり

月白き師走は子路が寢覺哉

芭蕉

子路は孔子の弟子中にて最も勇力を好み、志氣剛直の人物なりしが、
衛の國に仕へて其國難に死せり、時に敵人、子路を撃ちて其冠の纓
を絶てり、子路従容として曰く、君子は死に臨むも冠を脱せずとて、
遂に纓を結んで死せり

范叔は梟の羹食ひけり

青々

范叔は戰國時代の魏の國老須賈に仕へたりしが、賈と共に齊の國に
使す、齊王、叔の辨才を喜び金十斤を與ふ、賈は之を疑ひ、我國の
秘密を洩らしたるが爲なりと邪推し、國に歸りて宰相に讒す、之に
因りて叔は大に鞭たれ、且簀卷にされて小便所の中に投棄されしを、
竊に遁れ出で秦の國に往き、王を説きて遂に宰相となり、名を張祿と
改む、斯くとも知らずして賈また秦に使す、叔故らに汚衣を着けて賈
の旅館を訪ふ、賈その困苦を憐み一綈袍を與へしかば、叔は賈の御
者となりて秦の宰相の門に至りしが、忽にして叔の姿見えす、賈待
つこと久しきに耐えずして、范叔は何れに往きしかを問ふ、門番曰
く范叔とは誰ぞ、賈曰く今、我が馬車を御したる者なり、門番憤り
て曰く、汝知らずや、おれは張祿宰相なるをと、賈大に驚き且怖れ、

屈伏して昔日の罪を宥されんことを乞ふ、叔曰く汝の罪は實に死に
當れとも、我に綈袍を惠みたる情により、一命をゆるすべしとて放
ちたりとぞ

綿入の君毛遂と着膨るゝ

青嵐

毛遂は趙の平原君の客たり、平原君或る日毛遂に云へるやう、凡そ
賢士の世に處するや、宛も錐の囊中に在るが如し、立ろにして其末
顯はる、然るに先生は三年にして未だ聞ふる處なし是れ如何——と
て稍々其無能なるかを諷す、毛遂答へて曰く、吾れ若し早くより囊
中に在らば、當に其末の露出するのみならず、穎脱し(柄の抜け)了ら
んと、平原君之を奇とし、大命を帯びて楚の國に使用する時、毛遂を
同伴したり、楚王果して趙を輕んじ、平原君の使命を沮まんとす、
時に毛遂憤然として曰く、楚王の趙を輕んずるは國の大なるを恃む

に因らん、然れども我れ此に在り、十歩を出でずして王の一命を奪ふを得ん、國の大功を恃むに足らんと、意氣甚だ激し、楚王終に趙と合同するに至る、平原君國に歸りて大に毛遂の功を賞し、拔擢して上大夫に任じたりと云ふ

竹の月こゝに王維か琴も哉 孤水

王維は唐の人、九歳にして既に文を草するに巧みなり、書畫も亦其長技たり、深く佛を信し、常に蔬食に安んじ素衣を着け、妻を失ふてより復た娶らず、孤居三十年に及ふ、母の死後には其別墅を擧げて寺院となしたり。

霜寒く此夜馬稷を刎りぬ 鳴雪

馬稷は三國時代の蜀の將たり、孔明嘗て三軍を率ひ、魏の大軍を祁山に攻めし時、馬稷は孔明の軍令に違ひしたため大敗するに至れり、

因て孔明は涙を揮つて馬稷を斬り、三軍に徇へしなり

騎初や龍陽君の御装、青嵐

龍陽君は戰國時代に魏王の爲に寵愛されし美少年なり、龍陽君或る日魏王と舟を共にして釣す、其魚を獲ること多きに從て泣く、王其故を問ふ、答へて曰く、今や臣の醜を以て王の枕席に侍するを得れとも天下美人多し、王の膝下に美人の到ること、此魚の多きか如くならば、臣將さに棄てられんとす、奚んぞ涙下らざるを得んやと、王是に於て四方に令を布きて曰く、敢て美人の事を云ふ者あらば、三族を刑するの重きに處せんと、爾來龍陽の語を以て男色に擬用するに至れり

次韻して蘇氏兄弟か柚味噌哉 奇北

蘇氏兄弟とは、兄を蘇軾(東坡と號す)弟を蘇轍(眉山人と號す)と云

ひ、孰れも進士に登第し文藻才思の優れたるを以て、相偕に世に並び稱せられしなり

屠蘇酌むや郭子儀どんの大廣間 青 嵐

郭子儀は唐の玄宗帝以下四朝に歴事し、屢々兵馬の事に與かりて功勳少からず、故に位人臣の榮を極めしも衆敢て嫉まず、高齡八十三に及び、家人三十人を下らず、八子七婿皆顯要の身となり、諸孫數十人の多きに達し、悉く之を辨識する能はざるに因り、諸孫の來りて安を問ふ時は、僅に首領するのみなりしと

耕すや鄙人は知らず箕子の國 露 月

箕子は殷の紂王の親戚なり、紂王が奢を極むるを憂ひ、屢々諫むれども聽かず、因て髪を亂し伴り狂して奴となる、周の武王終に殷を滅したる後、箕子の忠烈を嘉みし、朝鮮國王に封して家臣とせざりき、箕子嘗て殷の故墟を過ぎ、宮室悉く廢れて其迹なく、徒に禾黍の生せしを見、感慨に耐えすして麥秀の詩を賦す、殷の遺民之を聞て流涕せざるは無かりしと

行く年の赤き衣や老萊子 青 嵐

老萊子は周の世に於ける楚の賢人なり、二親に事ること至孝にして年七十なるも身に五彩斑斕の衣を着け、嬰兒の戯嬉をなして慰む、楚王其の賢を聞き、聘して重く用ひんとせしも辭して仕へず、著書十五篇あり、其所論には孔子も深く感嘆したりとぞ

獨活堀りて郭巨が釜を夢みけり 青 嵐

郭巨は漢の人にして家甚だ貧なり、兒子に食を與ふれば母を養ふに足らず、因て妻に謂て曰く兒は再ひ得らるべきも、母は再ひ得可らず、寧ろ兒子を埋めんとて、地を堀りしに黄金の一釜を得たりとの

傳説あり

夏菊や婆子に詩を問ふ白樂天

露 月

白樂天は唐の白居易のこと、文漢詩思に長じたるを以て名あり、當時に於ても白樂天の詩文とし云へは、人皆争ひて傳寫したる程なり

(白樂天の事歴は第十一門
第三類白氏文集に詳なり)

鷹狩や涙を拂ふ蘇武か跡

露 月

蘇武は漢の杜陵の人、漢帝の爲に匈奴に使して拘留され、雪を嚼み氈を食ひ、或は羝を養ひ、居ること十九年、後ち辛ふして還ることを得たり、漢帝其苦節を嘉みし、像を麒麟閣上に掲ぐ

宋玉か文練る窓の日永哉

靜 山

宋玉は楚の屈原の弟子にて楚の大夫となれり、屈原か國王に忠なるにも係はらず、罪なくして放謫されしを深く悲み、九辨又は招魂な

どの諸賦を作りしなり

散る柳墨子か糸に泣く日哉

柳 香

墨子は宋の大夫にして、墨翟と稱せり、孔子に稍々後れ、孟子荀子には稍々先ちて世に出つ、其學説は兼愛説を骨子とせり、世に傳ふる所の墨子十三篇は、門下生の作りしものなりと云ふ

夜寒の戸鮑叔か來て敲きけり

逸 夢

埋火に管鮑何を語るらん

稻 香庵

鮑叔は齊の人にて鮑叔牙と稱せり、管夷吾(管仲)と最も友とし善し鮑叔夙に管仲の人物たるを信し、齊王に推舉して宰相たらしめんとを勸む、齊王之を聽き管仲を用ひたりしか、果して國威大に張り齊王遂に列國の牛耳を執りて覇を稱するに至れり○管鮑とあるは管仲と鮑叔とを連稱せるなり

趙括か兵を談する納涼哉

青嵐

趙括は趙の武將にして、少時より兵法を學ひ、之を講説するに能く及ぶ者なし、然れども是れ只兵書の上に屬するのみにて、實戰に臨みては運用變通の妙に通せず、是故に、秦と戦ひし時、大敗して四十萬の兵を失へり、是よりして徒に口舌の空論に走せ、實際上の伎倆なき者を稱して、趙括か兵法と云ふに至れり

納豆や淮南王に贈りけり

柚翁

淮南王安、始めて豆を磨し乳脂となし、名けて豆腐と云へり、是よりして豆腐の異名を淮南(ライ)と呼ふに至りしなり

▲女性の部

李夫人の化して屏風の牡丹哉

尹之

春雨や李夫人起きず香煙る

虚子

李夫人は漢の武帝の寵愛したる美人なるが、夫人の世を去りし後、

武帝は再び其音容に接したしとて、返魂香を炷きたりとの傳説あり

茶の花や惚るゝ人なき靈聖女

越人

靈聖女來らす杏腐り落つ

子規

靈聖女は靈照女の誤ならんが、漢の龐居士と云へる人の娘なり、父と共に禪を學ひ、才名高かりしも、容貌頗る醜にして、誰も娶る者無かりしとのことなり

趙飛燕巨燧の上に舞はせばや

子規

趙飛燕は本と長安の宮人なり、長するに及び歌舞を善くし、其技に巧みなりしかば、前漢の孝成帝之を納れて皇后とす、其妹合徳も并ひ寵せらる、特に飛燕は輕體細腰にして進退行歩の美あり、合徳は纖弱豊肌にして笑語に巧みなり、二人並ひ座する時は紅玉の如しと

云へり、其美想ふべし

薔薇花の下に兵を談する二喬哉

鳴雪

二喬とは昔し支那の三國時代に吳の國に住める姉妹の美人なり、魏の曹操之を得んと欲せしも遂げず、後ち其姉妹は吳の孫策と周瑜とに嫁したり

蚊を焼くや褒似が閨のさゝめ言

其角

褒似は周の幽王の寵妃なり、初め宮中に入りしも容易に笑はず、幽王之が破顔一笑の美を求めんと欲し、百方手を盡し、も未だ笑はず遂に故なくして烽火を舉しに、諸侯驚きて悉く來り會す、而かも何の異變なし、褒似大に笑ふ、其後敵軍來りて幽王を攻む、王乃ち烽火を舉げて諸侯を招きしも、皆な前事に懲りて來り會せず、王終に亡ぶ

照君か畫と短夜の旅寢哉

蕪村

照君は王昭君のこと、前漢の宮中の美人なり、嘗て漢帝が匈奴と和親を結びし時、宮女の一人を匈奴王の夫人として賜はることになりしが、誰も行くことを好まぬので、宮中の醜女を遣ることになつた是より前、宮女の多くは帝の寵を得んとて、畫工に金帛を贈り、成るべく眞の容貌よりも美なる様に揮毫を依頼したりしが、昭君はさる卑劣な手段を取らざりしゆゑ、畫工か醜女に描きて差し出し置しかば、圖らずも今回の撰に當りて萬里の胡地へ送られしとの哀れなる傳説あり

象潟や雨に西施か合歡の花

芭蕉

西施は一に西子とも書す、支那にては古今屈指の美人にして、越王勾踐が敵國たる吳を謀らんとため、吳王夫差に之を獻し、かは、吳王

其色に溺れて、終に國家を失ひたりと云へるほどなり

春殿の蠟燭赤し楊氏の女 露 月

楊氏の女とは楊貴妃のことなり、白樂天が楊貴妃の事を叙したる長恨歌中に——楊家に女あり養はれて深閨に在り人未だ識らず——云と叙せしもの是なり

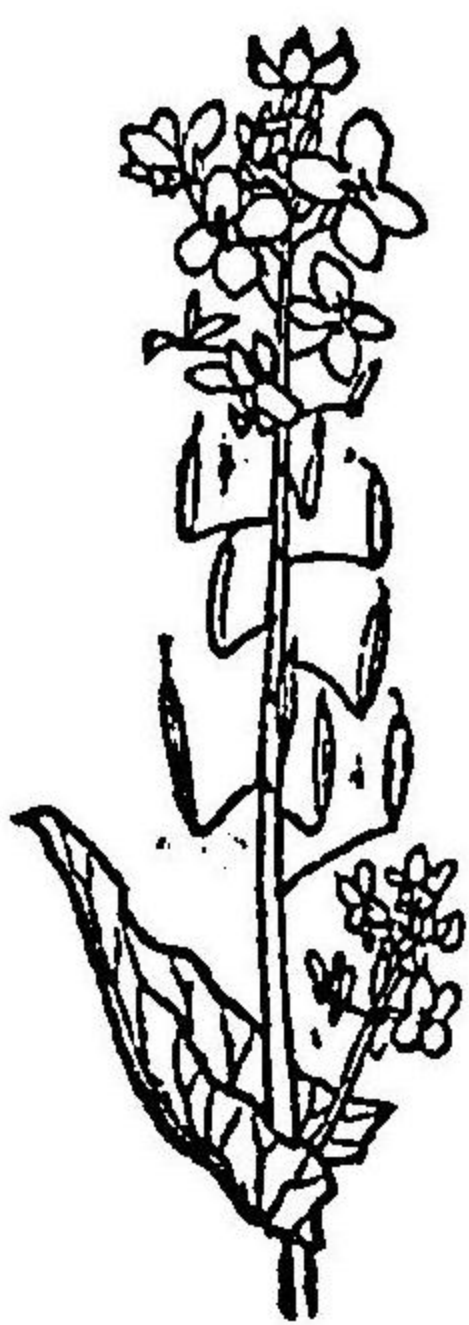
鴛鴦に笑ひ淋しき班女哉 馬 祖

班女は班婕妤(ハシヨシ)のこと、漢の成帝の宮中に在りし美人なり、詩文に通し古典に熟す、成帝嘗て後宮に遊び、班女と輦を同しくせんとす、班女恭しく辭して曰く、古への明君の側には賢臣侍座し、闇主の左右には嬖妾侍せり、妾、今輦を共にせは後世の譏りを奈何と、成帝之を嘉納して止む、後ち趙飛燕の宮中に入りて、君寵を專にするや、班女終に斥けられて、空しく東宮に屏居し、怨歌行を作る曰

く、新製齊紈素、皎潔如霜雪、裁來合歡扇、團々似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颺去炎然、棄捐篋笥中、恩情中道絶、

夜走りの卓文君や猫の戀 露 月

卓文君は司馬相如を慕ひ、夜に乗じて家を脱し、自ら箕箒の勞を執りたる美人なり、(其詳かなる事は、前に記せる相如の事迹と併せ見るべし)



第一門 人倫

正月や餅いたましましき采女達 几董

采女はうねめ又うねべとも訓す、昔しは郡の少領以上の女子にして容姿の端正なるものを朝廷に進貢せしめ、宮中にては御膳の事など司らしめられしと云ふ

命婦より牡丹餅たはす彼岸哉 蕪村

豆撒いた跡や命婦の立廻る 秋左

命婦とは宮中に仕ふる女官の職名にて、掌侍などよりも地位低し、現今の制度にては判任官待遇なり

はしたなき女孀の嘆や杜鵑 蕪村

女孀たちのもの驚きや今朝の秋 雁宕

春の夜やよき女孀見たり油さし 五鳳

女孀はによじゆ又にようじゆとも訓す、女官の中にて卑しき役を勤むる者を云ふ、一書には内侍司に屬して掃除黠油等を掌るとあり

女孀なら舟へと申せ杜若 召波

上臈の見てゆかれけり大根引 一草

女臈又上臈じやうらうは公卿の女の年功を積みて二位三位に昇りたる者の特稱なりしが、後には身分よき女子一般の稱となれり

返歌なき青女房や暮の春 蕪村

夜神樂や青女房の夕化粧 旨原

青女房とは内裏又は貴紳の内に仕へし女中の稱なり、蓋し青女房と云ふのは、青侍と云ふに同じく、位地の低き身分である、大名の奥女中などに比すればお末と云へる程のものならん

たらちねのつまゝすありや雛の鼻

蕪村

たらちめの湯婆やさめん鐘の聲

鼠得

たらちねの花見の留主や時計見る

子規

たらちねとは垂乳根と書す、即ち母親の義なり、但し場合によりては兩親を指すことあり、たらちめも母親の義にして垂乳女と書す

磯菜摘奈古のてこなのうら若き

芻路

てこなは、あてこ(貴兒)なの略なり、なは親しむの義にして、あてこなとは、あてやかなる容姿、即ち見目よき娘と云ふことなり

わきも子か爪紅のこす雪丸け

掬丸

わきもこは吾妹子と書す、吾妹と云ふに同し、即ち吾がいもの略にして、女を親しみて呼ひかくる語なり(古語)

春雨の古き涙や梓神子

太祇

秋の暮誰か爲に行く梓巫子

志宇

梓神子(あづさみこと)は、梓弓(あつさにて作りし弓)を引きならして、神下ろしをする巫子、即ちいちこのことなり

稻かつく母に出迎ふうない哉

凡兆

うない兒の尻端折けり山櫻

旨原

うないとは髻髪と書す、幼き兒の項に垂るゝ髪を云ふ、故にうない兒とは髻髪子のことにて、髪をうないに結ひたる童を指したるものなれど、後ち轉して一般に童男童女を指稱することになれり

星合に我妹かさん待女郎

嵐雪

待女郎は婚禮の時、新婦に付き添ふ腰元を云ふ

むかひ腹に公達多き幟哉

紫影

むかひ腹は當腹と書く、即ち現在の妻のうめると云ふ義にて、先妻

に對する語なり

玉霰 漂母か鍋を亂れ打つ 蕪村

漂母の漂は、たゞよふ又はそゞの義にて、洗濯婆のことなり、或は又漂母は秦漢の頃に於ける隱君子の稱にして婦女にあらずとの説あれど、普通は前解に依るもの多し

くゞつにも親はありけり秋の風 保吉

くゞつ又くゞすと云ふは、傀儡、遊女、宿場女郎等の義なり

阿古久曾の心は知らす梅の花 芭蕉

阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉 蕪村

芭蕉の句中の阿古久曾は、紀貫之の幼名を採りて作爲せしものならんか、しかし王朝時代には門地ある人の子供を呼んで、阿古久曾とせしゆるゑ、蕪村の句は必しも貫之と限りて解するに及はざるべし

御子良子の一もとゆかし梅の花 芭蕉

こらたち(子良館)は伊勢神宮の境内にある舍殿の名で、俗に神樂所と稱し、そこに神饌を供する少女か奉仕して居るのを御子良子と云ひしなり

七夕や暮露呼び入て笛を聞く 其角

打はたす梵論つれ立て夏野哉 蕪村

咄して梵論の過るや朧月 闌更

梵論又暮露は、ぼろと訓す、即ち虚無僧のことにして、又ぼろんじとも云ふ

弱法師我門ゆるせ餅の札 其角

二三本芥子作りけり弱法師 闌更

弱法師は盲目法師の義なり○餅の札とは、昔し江戸の乞食頭に若干

の金子を與へ、年の暮に乞食物もらひなどか、餅をもらいに來ぬ様に、仕切札を門口に張らせしものを云ふ

鞍打くらうちか門を過ぎけり時鳥 保吉

朧月放下の親子戻りけり 維駒

青さしや偶ま來る放下僧 青嵐

放下僧は、田樂法師歌祭文の類なり、即ち出家の身にて歌ひ舞などして、様々の戯伎を爲すものを云ふ

沙彌律師相剃をして月見哉 其角

沙彌律師ころりくと衾哉 蕪村

沙彌しゃみは梵語にて惡を止め善を行ふの義で、即ち佛門に入り剃髪したる男子を云ふ○律師は僧の官名にて、昔は五位に準し正律師權律師

の稱ありき

乗物で優婆夷も來る御身拭 召波

菊呉れる隣の優婆夷懇なり 極堂

優婆夷うはひは梵語にして清淨なる女と云ふ義なり、女の髪を下ろさずして佛道に入りたる者、即ち俗世間に在りて、能く五戒を持する女を云ふ

優婆塞の紙衣裂れし十夜哉 守水老

優婆塞うはそくも亦梵語にして清淨なる男子と云ふ義なり、即ち身は俗間に在りて佛門に歸し、宛も僧侶の様に持戒する男子を云ふ、故に多くは優婆夷優婆塞と連稱するなり

大徳を迎ふる皆の黄帷子哉 未央

大徳とは名僧即ち知識の僧を云ふので、一般に僧の敬稱として用ゆ

舍利となる身の朝起や艸の露 蕪村

舍利は梵語にてさりに同し、人を焼たる骨の中に米粒の如き物あるを云ふ、佛の舍利は五色に光るとも云へり、然るに一説には、舍利は一切の物を以ても破壊することの叶はぬ物としてある、其形は萬年青の實の如くにして、色は白、紅、黒の各種ありと云ふも概ね白舍利多しとなり

勾當の身を泣く宿や暮の秋 几董

勾當は盲人に賜はる官名のことなり、又宮中にも勾當と稱するあり是は勾當内侍の略稱にして、四人の掌侍中にて第一に位する人を勾當内侍と云ふ、後醍醐天皇より新田義貞に賜りたる女官も勾當内侍たりしなり

石女の雛かしくつくぞ哀れなる 嵐雪

石女と暮れ行く秋を惜みけり 召波

石女の心やすさよ三井詣 武陵

石女はうますめと訓み、又不生女とも書す即ち子を産まぬ女を云ふ

大原女や紅葉て叩く鹿の尻 其角

大原女の足の早さよ夕紅葉 蕪村

大原女の野分に向ふ抱へ帯 園女

小原女の好い子産みけり春の月 重厚

大原女はおほはらめ又は約めておほはらめ(小原女)とも云ふ、山城國愛宕郡大原村邊より出づる女子の稱にして、概ね黒き衣裳に白き手甲をかけ白き脚絆を着け、薪を頭上に乗せ、花など折り添えて、黒木めせと呼びつゝ京の市中を賣りありくを業とす、雅趣ある風姿にして京都名物の一なり

月清し遊行のもてる砂の上

芭蕉

水鶏啼く夜半に遊行の勤め哉

其角

御札賣る遊行の柳緑なり

化半

遊行とは僧の諸國をめぐりあるくを云ふ、即ち行脚雲水に同じ、又遊行上人と稱せし高僧もありき、故に句意によりては特に上人を指稱し又は普通の行脚僧を指稱するものありと知るべし

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

蕪村

甲賀衆とは伊賀の甲賀の士を云ふ、しのびの術に長し居たりとそ

番鍛冶の猶暑からん頬の瘤

彩雲

番鍛冶とは昔し諸國より京都へ勤番したる鍛冶を云ふ

猛者一人夜なく出て、火串哉

笠雨

猛者は、もさ又もしやとも訓む、田夫のことなり

五月雨や龍燈揚げる番太郎

芭蕉

朝顔に夜も寝ぬうそや番太郎

太祇

番太郎とは昔し江戸市中の處々に設けたる木戸の番人にて身分賤し

き者なりき

白露やさつ男の胸毛ぬるゝほど

蕪村

さつをば、獵夫の古語なり

風聲のをり居の君や遅櫻

蕪村

おりゐとは、下りて居る義なり、土佐日記に……磯におり居て別れかたきことを云ふ……とあり、又おりゐのみかどとは、御位を退き玉へる天皇即ち太上天皇を云ふ

まれ人の晝寝長かれ柱鮓

儿董

まれ人は、まらうどの音便にて、即ち賓客の義なり

鬢白きかたうど得たり梅の花
北枝
かたうどは、かたびとの音便にて、我にかたんする人、即ち我方なる義なり

花盛六波羅禿見ぬ日なき
蕪村

六波羅禿とは、平清盛が己を誹謗する者を探らしむる爲、十四五才の少童凡三百人ばかりを京洛中に放ちたりしを云ふ、其風姿は髪を禿に切り、赤き直垂を着けしが、人皆忌み恐れて道を避けたりとそ

後シテの面や月の瘦男
几董

脇僧の顔をそむける煙哉
蝶夢

シテワキに煙の傳ふ薪哉
狸魚

シテは、爲人と書す、即ち行ふ人、する人の義で、能狂言などにて主となり其技を行ふ役にして、ワキ又はツレに對して云ふ詞なり○

ワキはわきし(脇師)の略で、即ち能狂言などにシテの相手になるものを云ふ

鹿遠しいでや照射の手だれ者
召波

てだれは、てだり(手足り)に同じ、即ち其技に精熟せるを云ふ、古書に……なにがしのおとゞ(某大臣)は、さうなきてだりにておはせしかど……とあり

那須七騎弓矢に遊ぶ給哉
蕪村

那須七騎は、永祿年間下野國に割據せし豪族那須氏の旗下に、福原大關、大田原、芦野等の武家ありしを云ふ

雉子啼くや草の武藏の八平子
蕪村

破魔弓やあたり隣の八平氏
蓬室

八平氏とは、平氏の血統たる千葉八田など、八家の豪族ありしを云

ふ

乙の君ある夜ひそかに踊哉 召 波

乙(おと)は、次又末の義にして、おと矢、おと子と云ふの類是なり

鷹狩や豫陽の 太守武を好む 子 規

豫陽とは伊豫國を云ふ、豫陽軍記など云へる書名に因りしものならん

大徳を迎ふる 皆の黄帷子哉 未 央

大徳とは名僧即ち知識の僧を云ふので、一般に僧侶の敬稱として用

ゆ

浅妻に墨引かれたる 袷哉 平 角

あさつまは近江國阪田郡朝妻と云へる地に、昔し賣女の住み居たるに因り、此稱へあるに至れり

春の夜やものぐさ者の物買に 成 美

ものぐさ(物臭)とは事を爲すに物うかる人、即ちなまけ者のことなり

小冠者出て花見る人を咎めけり 蕪 村

夜を寒み小冠者伏したり北枕 同

冠者くわんじやはくわんざとも云ふ、是れくわんじやを約めたるなり、元服し

て冠をつけたる年頃の男子のこと、又單にわかうどの義としても用ゆ、又六位にして無官の人をも冠者と云ふ、但し此句に云へるは後者にあらずして前者の義なり、故に小冠者とは年少者を云へるなり

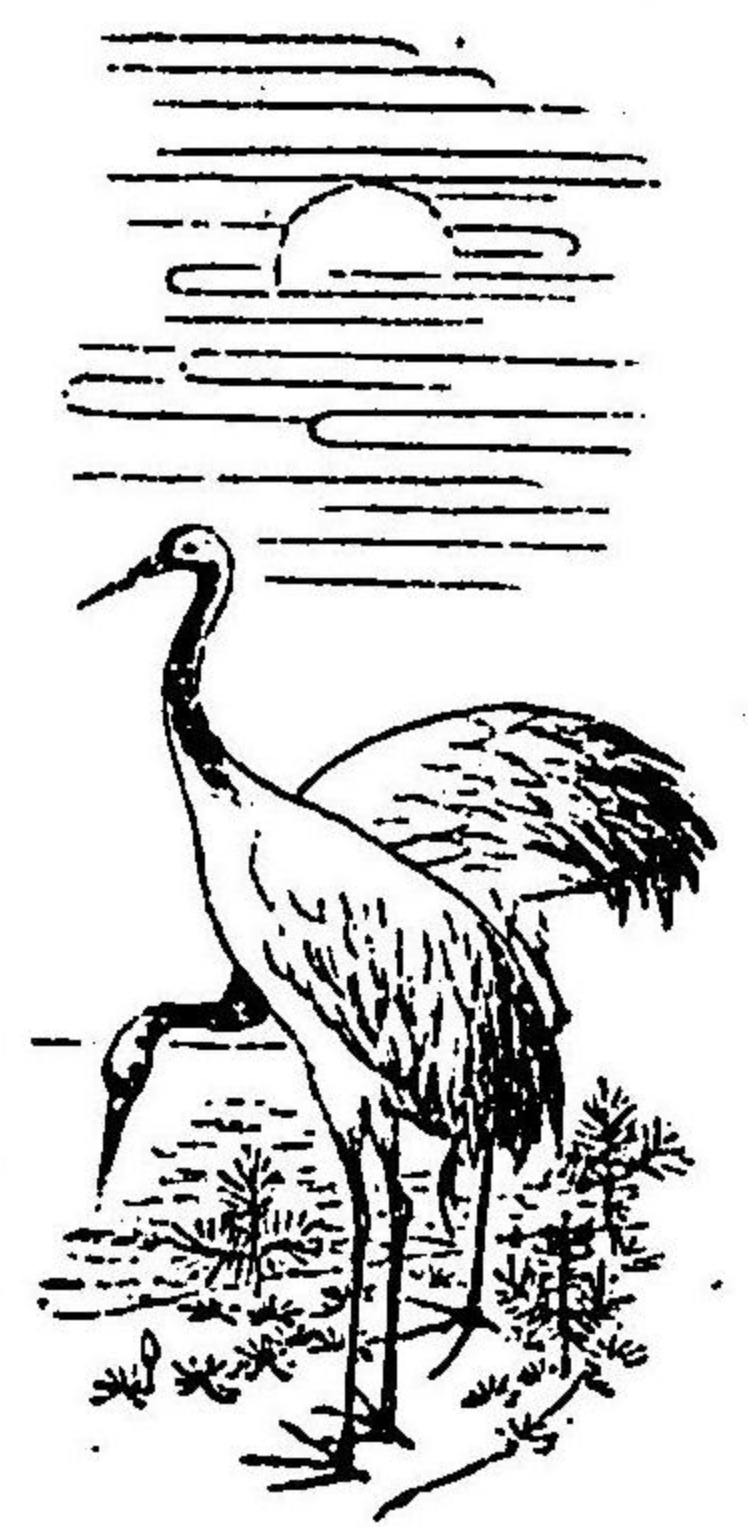
曲水や硯に阿古の落花磨る 師 竹

あことは我か子を親しみて呼ひ稱ふる古語なり、源氏に||あこはらうたけれどつらきゆかりにこそ||とあり、又みづしどころ(清所)を勤むる官女をも、往昔はあこと稱せり但し此句にては前者の

義たるべし

鳴神や宮奴走る葵橋露石

宮奴(みやつこ)は朝廷に奉仕する人即ち文武百官の總稱なり



第三門 動物

春雨にぬるゝ麋の背中哉 蕪村

麋きは、薰鹿即ち麝香鹿のことなり、其形鹿に似て小さく且角なし、

雄には牙あり、皮極めて柔かにして用多し、和産は無しとぞ

小男鹿や岩に踏ばる雲のすき 去來

小男鹿に手拭貸さん角の跡 一茶

棹鹿のかさなり伏せる枯野哉 土芳

さ小鹿の踏み濁しけり春の水 完來

棹鹿、小男鹿、いつれもさをしかと訓むも、別に特殊の別あるにあらず、さは發語にして意義なく、單に男鹿(をしか)と云ふに同じ

篋鷺は無言の行や行々子 一茶

篋鷺くわろは、鷺の一種にて其嘴平たくして篋の如し、故に名つく

萍にかゝるの子遊ふ汀哉 百明

かるとは、かゝるかも(輕鳴)の略にて鳴の一種なり、頭の後方青く光り、眼の上に青白き條あり、嘴は黒く其尖は赤し

鼻去りて琵琶湖の水のぬるみけり 二巾

鼻けりは、水邊に居て魚を捕る小鳥なり、大さ鳩ほどあり、頭と背とは灰色を帯ひ、胸腹は白く、翅は黒白相交れり

猿子鳥青梅に來て落しけり 逸夢

猿子鳥まことりは、しとゞの類にて大さ雀ほどあり、全身灰白色を帯ひ、翅に黒き斑あり、尾の先に白き羽を有し、胸と腹とは赤し

杉に鳴く佛法僧や露時雨 友親

佛法僧は、深山に栖む鳥にして鳩に似て小さし、頭は淡黒色を帯び

腹背は碧綠相交り、尾と翼とは黒く、嘴と脚とは赤し、鳴く聲ぶつぼうそうと聞ゆ、故に此名あり

廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎 史邦

沼太郎は、えどひしくひと云ふ鳥にて、其形ひしくひに似て眼の上に白き條あり、水鳥の一種なり

鳩鳴くや秋の初風身にまとふ 岐山

鳩にほは、鼻に似て小さく、小鴨よりも大きく、水を潜ること巧にして巢は木の葉、藻艸などを集め、水上につくり浮ぶ、一名かいつぶりとも云ふ

都鳥それにも煤をあびせけり 一茶

萬才は今も鳥帽子ぞ都鳥 子規

都鳥は、水鳥の一種にして鷗の類なり、全身白く嘴と脚とは赤し、

業平の歌に詠したるより、人口に膾炙する鳥の名となれり

箱鳥や明け離れたる二子山 曾良

箱鳥は、かほよどりに同じ、凡て美しき鳥の總稱なるが、一説には鴛鴦の異名なりと云ひ、又翡翠の略なり、或は雉子の雄を云ふとありて明かならず、此句にては雉子と解する方ならん

奥の院何やらものが呼子鳥 三千風

夏山やどこを目當に呼子鳥 一茶

呼子鳥は、深山に栖む鳥で鳩に似たり、羽毛は淡黒色を帯び、腹は赤みばしる、鳴く聲宛も物を呼ぶに似たり、故に此名ありと云ふも未だ定かならず、一名閑子鳥とも云ふ、即ち古今集三鳥の一なり、古今に……遠近のたつきもしらぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな……とあり

椶の實ちる椶鳥の羽風や朝嵐

芭蕉

椶鳥のわつかに磨く頭哉

乙由

椶鳥は、鳩に似て小さし、頭は白く背は灰黒色を帯び、嘴と脚とは黄なり、群飛して鳴くこと喧しく、椶の實其他の木の實を食す

里神樂長鳴鳥の鳴夜哉 田士英

長鳴鳥は鶏の異名なり

風鳥の喰ひこぼしや梅の花 蕪村

風鳥は原名バライスと云ふ、南洋諸島の熱地に産する美麗の鳥にて嘴の根に天鵝絨の如き短き羽毛あり、雌には麗はしき尾無けれど雄には長くしき山鳥の尾よりも長き羽毛ありて、其數百を以て計ふべし、是故に一名尾長鳥とも云ふ、此鳥に就ては西洋にても種々の迷説ありて、此鳥は空中にのみ翔り居るものと妄信し、爲に樂土

鳥(パラダイス)の名を付せしなりと云ふ、風鳥とは支那の譯名なるが、我國には和蘭人などか初めて齎らし來りしならん

渡り來る菊 戴きも節句哉 項 雪

菊戴は、形ち眼白に似て秋季に渡り來る鳥なり、背と翅とは綠色を帯び、腹は灰色にして、頭の上に菊に似たる黄色の羽毛を戴けり、故に名つく

ばかとりののめりありくや雲の峰 道 彦

ばかとりは信天翁と書す、一名あはうどりとも云ふ、南洋諸島に栖める鳥なり

月今宵鴛鴦か思ひ羽生え初めん 道 彦

思ひ羽に月さす鴛鴦の浮寝哉 青 蘿

思ひ羽は、一につるぎ羽とも云ふ、即ち鴛鴦の兩脚にある銀杏の葉

の如き形せるものにて、一名いてふばとも云ふ

鼯鼠の小鳥食み居る枯野哉 蕪 村

鼯鼠は、常に樹上の朽穴などに栖み、夜出て、菓實を食ふ、形は猫に似て稍々瘦せ、前肢と後脚との間に肉翅あること宛も蝙蝠に似たりしかし此肉翅は飛行の用を爲すにあらず、唯樹上より飛び落るに際し、急劇に墜落するを禦くの用をなすこと、宛も風船乗の傘に似たるなり、多くは北國の山林に栖めり、一名もゝんが又はのぶすまとも云ふ、鳴き聲は小兒の泣くに似たり

めづらしや内で花見の初めじか 杉 風

棹の歌はやうら涼しめじか舟 湖 春

めじかは、魚の名にて、めじかかつをに同じ、關西の方言なり

氷魚よるや三上を出つる廿日月 髭 風

氷魚は、形ち白魚に似て小さし、冬季に網代にて取る、山城國宇治川、近江國琵琶湖等に産するもの最も名あり

鱸釣るころもあるらし鱸釣 半 殘

鱸は、鱸の小さいので、地方に因りては一年魚をせいご、二年魚をふつご、三年魚を鱸と云ふ

北の方雪雲黒しいさな取 桃 雨

海國の果報男やいさな取 螢 雪

いさなは、勇魚の義にて即ち鯨のことなり

あやまりてぎょう押へる鱸哉 嵐 蘭

きゅうは、ぎゅうとも云ふ、河鹿に似たる魚にて刺あり、肉の味美ならず、一名ぎゅう又ぎす又はあいかけとも云ふ○鱸は、かじかと訓む谷川に栖める魚にして俗にこりと云ふ

枯芦や朝日に氷る鮠の顔 惟 然

鮠は鮠に似て大き四五寸に及ぶ、背は稍々淡黒色にして青ばみたり概ね淡水に栖む、一名はやとも云ふ

時雨るや並び兼たる紗舟 千 那

暮てゆく湊の春や紗舟 廉 志

紗は、近江の琵琶湖に産する魚にて、一名さのぼりとも云ふ、全體沙魚に似たり

鮠の淡きには飽く人もなし 五 明

鮠は、雷魚とも書し、はたくと訓む、雷鳴の際多く群れ集るにより此名あり、全體銀色を帯びて長さ七八寸に及ぶ、冬季には秋田青森の近海にて取る、其地方の人好みて食す

木枯となりぬ蝸牛のうつせ貝 其 角

予予のわくや浮世のうつせ貝 重厚
松島の月見ぬ人やうつせ貝 蕪村
わりなしや海苔に纏るうつせ貝 二柳
うつせ貝は、肉の脱けたる貝にて、即ち實なし貝のことなり、故に
虚貝とも書す

行春や猪口を雄島の忘れ貝 其角
忘れ貝は、その實物詳ならず、或は蛤に似たるものとも云ふ、後世
は何の貝にても、憂さを忘るゝために拾ふ貝を云ふに至れり

春風や二つになりし帆立貞 葛三
帆立貝は、売に堅なる廣き溝數條ありて、売の一片は平かに、他の
一片は稍々窪めり、水面を行くには、その窪める方を舟の如くにし
平たき方を帆の如くにし、風に乗じて走る故に此名あり、売の大な

るは鍋に代用し、小なるは柄を付して杓子とす、一名海扇又はいた
や貝とも云ふ

とこぶしは霽の小貝か磯の月 嵐雪
とこぶし(鰈)は、あはびの一種にして、形小さく売薄く味淡し

胴龜や昨日植たる田の濁り 許六
胴龜は、泥龜(すつばん)のことなり

錢龜や青砥も知らぬ山清水 蕪村
錢龜とは、大さ一寸ばかりの龜の子の稱なり

名月や潮満ち來れさゝれ蟹 蓼太
さゝれ蟹とは、小さき蟹の義なり、即ちさゝれ又さゝらとは、小さ
しと云ふ意にて、小萩をさゝれ萩、小波をさゝれ波など云ふの類に
同じ

明易き夜をさゝくもの巧み哉 活堂

さゝくものは、笹蜘蛛又艸蜘蛛と書す、形ち普通の蜘蛛に似て小さく、色斑らなり、常に穴の中又は草木の茂れる處に居てあみを作る

日の暑き盟の底の蛾哉 凡兆

蛾はうんかと訓めども、今日に所謂浮塵子(うんか)の義にあらず、蜉蝣のやうに朽木などにわく虫のことにて、蛆の小さきものなり

河音につれて鳴出す河鹿哉 涼菟

雨の河鹿石に伏す夜の恨み音か 長翠

河鹿は、爬虫動物の一種にて蛙に似たり、色黒く體瘦て疣あり、概ね谷川の岩間に栖む、籠に飼ひて其聲を愛す

あぢむらや羽風に光る夜の海 玉屑

あぢむらは、あぢかも(鶴鳴)の群かれるを云ふ、あぢかもは、鳴に

似て小さく、小鴨よりは大にして、嘴脚ともに黒し、常に群をなして飛ぶ、又單にあぢとも云ふ

門を出れば山うす青し百千鳥 樽平

百千鳥は、數多くの鳥と云ふ義にて、もゝとり(百鳥)に同じ、古歌に……もゝちとり囀つる春はもの毎に……とあり

飛んで又緑に入るや松むしり 惟然

まつむしりは、松雀と書す、山中に栖む小鳥の名にして、形ち小さく翼は灰色なり

俗に云ふうぶめなるべし呼子鳥 其角

うぶめは、うぶめ鳥(孕婦鳥)のことにて、形ち鷗の如しと云ひ、又は鳶の如しと云ひ、或は是れ全く想像の名にして其實なしと云ひ、諸説詳ならず、或は又産婦死して其一念迷化し、終に此鳥になれり

この傳説すらあり

せはしけに鳴くを常なる懸巢哉

潮 堂

懸巢は、山林に栖む鳥にて形ち鳩より小さく、翅は淡黒色を帯び、黄と青との斑あり、性瘁猛にして小鳥を捕り食ふ、能く飼ひ馴らせば諸鳥の聲、又は人語をも真似る、巢を樹枝にかけて作るがゆる此名あり

檜鳥や宿とりかねし入日過

沙 羅

檜鳥は、前に記したる懸巢の別名なり、此鳥は概ね檜の木に栖めるよりして斯く云ふ

かくぶつ の 獲物少き翁哉

蕪 村

かくぶつや腹を並べて降る霞

拙 候

かくぶつは、杜父魚とも書し、又石伏(いしぶし)とも云ふ、水上に

浮ばずして概ね河石の間に栖む、故にいしもちの名あり、其他地方によりて異名多し、形ちは沙魚に似て頭大きく口廣し、全體は淡黄色にして黒斑あり

陽炎のあとに氣を吐く守宮哉

閑 更

守宮は、形ち蟻(あもり)に似て頭平たく尾短く、概ね家の壁間に栖む、體は灰色にして黒斑あり

駒鳥の目のさやはつす高音哉

傘 下

駒鳥は、形ち鶯に似て大きく、背より尾までは樺色にして、胸腹は白し、鳴く聲は轡の音に似たり

緑毛龜の葎にこもる五月哉

白 雄

緑毛龜は、みのかめと訓む、祝ひの場合などに珍重するものなれど其實珍らしとするに足らず、通常のいしがめなど、長く水中を出で

ざる時は、其甲背にあをみどろ（水綿）と稱する藻類生え茂り、ふさふさと引きはゆるに至る、蓋し龜類は冷血動物なるゆる運動活潑ならず、隨て藻類の付着し易き所以なり

金龜子百合を掠めて飛にけり 青々

金龜子は、こがねむしのことにて、或はかなぶん／＼又はひとりむし、あぶらむしとも云ひて種類頗る多し

虬斬て淵紅るや寒の水 露月

虬みづなは虬龍のことにて、廣雅に——龍にして鱗あるものを蛟龍と云ひ翼あるを應龍とし、角あるを虬龍、角無きを螭龍、未だ天に昇らざるを蟠龍と云ふとあり

第四門 植物

接待や菩提樹畔の片庇 蕪村

菩提子の實の散る中に後の月 平角

菩提樹は、昔し千光國師が宋に入り、此種を得て歸朝せしと云へるが、此樹は一株にして二様の葉を有す、其一は木犀の葉に似て、他の一は棕の葉に似たり、枝と枝と相結着して生長するものにて頗る奇樹なり、而して樹の全體は百日紅に似たり、花咲き實を結ぶ、其實は堅硬にして念珠とす、香氣亦佳なり、一説に、釋迦は天竺の此樹下にて佛道に入りしと云へり

さびしさや花のあたりの翌檜 芭蕉

翌檜は、あすならうと訓む、羅漢松の異名にて檜の一種なり、其葉

は檜の葉よりも稍々大なり、あす(明日)は檜にならうとの義に因りて此名あり、其能く檜に似たるを知るべし

達磨忌やから松ふくむ鳥の聲 春 來

からまつ(唐松)は、松の一種にて黒松に似たり、葉は五線ありて裏白く、實の長さ六七寸に及ぶ、其鱗甲の間に米粒よりも稍々大なる仁あり、其味胡桃に似たり、一に落葉松とも書す

蕙苡すいたまの小道盡きたり曼珠沙華 子 規

蕙苡は、黍に類し葉間より莖枝を分ちて穂を出し實を結ぶ、其實の一端に白き髭様のもの二條あり、熟するに従ひ、其髭脱落して迹に小孔を存す、兒童其孔に糸を通して念珠を作り翫ぶ

うつぼ艸こ、五月雨の湊哉 道 彦

うつぼ艸は、其葉薄荷に似て莖は方形なり、夏季に唇形の紫花を着

く、又葱の異名として用ゆ

柞原薪樵るなり秋の暮 巢 兆

鹿鳴ては、その木末荒にけり 蕪 村

柞は、は、そ又こなら或はさるぶるとも云ふ、其葉柏に似て細尖あり、薪炭の材料として適當なり、又香葦を作るにも用ゆ

梶の葉に配り餘るや女文字 儿 董

梶の葉の反古や星の朝嵐 宇 冬

梶かぢは、楮の類にて葉は一尺ほどにも及び五つに分岐す、花實ともに楮より大なり、皮にて紙を製す、七夕には、其葉に歌句の類を書きて吊るすにより、星祭の句には梶を訓みたるもの多し

雉子一羽立て辛夷の夜明哉 白 雄

辛夷こいしは、花の蕾の形ち宛も子供の拳の如くなるより此名あり、木蓮

の類にして山中に自生す、秋冬の間に葉落ち蕾残り、春に至り新葉の出でざる前に六瓣の花を開く

田槌打つ音も聞えて馬酔木咲く 護物

馬酔木は、其葉細長く、周りに鋸齒状の刻みあり、冬も枯れず、春に小さき白色花を開く

石南花や誰に折られて岩の上 志紅

石南花は、概ね深山に生ずる灌木にして、葉の本廣く末狭くして深緑色を帯び、高さ六七尺に及ぶあり、花は薄赤にして夏季に開く、又さくなげとも云ふ

さくくさは、淡竹葉のこと、葉長く莖細ふして形ち笹に似たり、根に鬚あり、其ひげに實を結ぶ

五月雨の岩檜葉の翠いつまでぞ 芭蕉

岩檜葉は、いはひば又はいはぐみとも云ふ、深山の石上などに生ず、葉は檜に似て薄く能く繁る、一名いわこけ又くさこけとも云ふ

玉笹の二ふし三ふし清水哉 園女

玉笹は、笹をたへ稱する詞にて、特殊の義あるにあらず

花御堂釣鐘草もあらまほし 蓼太

釣鐘草は、多く山野に生じ、春舊根より芽を出して莖を生ず、葉は桔梗に似て大なる鋸齒あり、秋に淡紫又は白き花を着く、其形ち風鈴に似たり、因て釣鐘草の名あり

なよ竹の末葉残して紙幟 其角

なよ竹(萎竹)は、しなやかなる竹の義にて、細くしてなよくとしたるを云ふ

吳竹の代々に葵の祭哉 樽良
吳竹の伏見を出たり團扇賣 関更
吳竹の代々とも申せあやめ賣 詠歸

吳竹は、竹の一種にて節多く、葉細うして長し、吳の國より渡りしものと云ふ、吳竹のと云へば枕詞となり、代にかけて應用すること多し、例へば古今集などにも……くれ竹のよゝのふるること無かりせば云々……とあるの類なり

ひよんの葉の落てあるくや蝸牛 儿董
ひよんの木や聖訪はるゝ片折戸 文川
ひよんの木に蟬百疋の殘暑哉 虚子

ひよんの木は、猿笛さるがえとも云ふ、此樹には桃の實ほどの木瘤實を結び中に無数の小虫を宿し、其虫出づる時は、殻に小さき穴を生ず、其

穴を吹けば笛の如くひゆうくと鳴る、葉はひめつばきに似て小さし

螢待つ夕や澤の花かつみ 青蘿
かつ色やかつみかけゆく負具足 曉臺

花かつみは、まこも(眞菰)又はかまやまあやめなりとも云ひて種々の説あり、兎に角澤邊に生ずるものたるは明かなり、一書には、かたばみに似たる草にて池沼水田に生ず、根は蔓状をなし、其葉は四片の小葉合して一枚となる、故に四葉とも云ひ、夏季に白色の花を着くとあり、古歌に……女郎花咲く澤におふる花かつみ云々又みちのくのあさかの沼の花かつみ云々とあり、かつみは花かつみの畧なり

川芎のたまさか匂ふ茂哉 嵐雪

川芎せんきゅうは、高さ二尺内外の草にて、葉莖とも緑色を帯び香氣あり、葉は芹に似て細し、秋に花を開く、根も亦香氣あり、薬用とす

若竹や龍這ひのぼる籜たけからし 巢 兆

籜たけからしは、蔓艸の一種にて、春に宿根より生ず、葉は互生し稍く楓に似たり、初めは赤く黒ばみ後ち淡緑色となる、葉に髭ありて物にからむ、夏秋の頃に花を開き實を結ぶ

竹の子に括り添たりしやがの花 儿 董

しやが(著莪)は、いちはず(鳶尾花)の類にして、淡黄又は淡紫白色の花を開く、一に胡蝶花とも書す、一説にしやがとは射干(ひあふぎ)の漢音より轉訛せしならんと云ふ

陽 炎 や 柴 胡 の 糸 の 薄 曇 芭 蕉

五月雨の雲や柴胡のむら茂 露 月

柴胡さいこは、薬草にてせりの古名なり、春に至り地上に叢生するものにて其葉は長し

じねんこの藪吹く風ぞあつかりし 野 童

じねんこ(自然抗)は、竹の實のことなり、即ちさゝみどりに同じ

閑子鳥啼や四月の母子艸 保 吉

母子草ははこぐさは、原野に生ず、高さ六七寸莖はすべり莧あまぎに似て薄く、且長ふして軟き白毛あり、春夏の頃黄色の花を着く、餅の中に加へて搗く、一名ひめよもぎとも云ふ

蒲公英のものいみの日ぞ佛の座 衛 門

佛の座は、前に記したる母子草の異名なり、春の七草に用ゐるとききの稱たり

毳隠るやと蘇にさす藪柑子

杉風

初雪や實はふりのこす藪柑子

青羅

藪柑子は、山の樹陰に生ず、高さ四五寸、葉の形は茶の葉に似て稍薄く、縁に細き鋸齒あり、夏白色の小花を着け、秋に豆大の實を結ぶ美にして赤し

落葉焼く中の匂ひや枳椇

五明

枳椇は、落葉喬木にて梨樹の一種なれども、果實の形は全く異なり即ち枝梢に小さき花を着けたる後、花梗に曲りくねりたる瘤状の肉を生ず、冬に至れば熟して褐色となる、之を喫めば甘味あり、百果中の奇形なり

常山の實翻れそめけり夜の雨

魯竹

秋日和常山の花に過にけり

道彦

常山は、野生の草にて高さ數尺に及ぶもあり、葉は梓の葉の如く圓くして尖れり、夏の末つ頃白色五瓣の花を開く、葉には惡臭あり、くさぎ(臭木)と云ふ所以なり

さいかしや吹からひたる風の音

吳江

さいかしは、さいかち(皂莢)のことにて夏黄色の小さき花を開き、實は藤の實に似て大なるは尺餘に及ぶ、その實を揉みて洗濯の用とす

龍膽や御陵道の小笹原

丹士

龍膽は、莖二三尺葉は笹に似て圓く短し、花の形は鈴の如くにして末端五つに岐る、色は瑠璃にして美なり

女郎花ゑのころ草になぶらるゝ

野童

ゑのころ草は、粟に似て其穗の形宛もゑのころの尾の如し、故に狗

尾草とも書す

しやんとして千草の中に我木香 路 通

我木香は、地榆とも書す、葉の形ち藤に似て對生し鋸齒あり、一葉より數十葉を叢生す、秋季その叢中より數莖を出す、高さ四五尺、枝端に紫黑色又は紅白色の細き花を着く、實は桑の實に似て紫黑色なり

檀特や花を包みし葉の幾重 芳 存

檀特花は、芭蕉に似て小さく高さ三四尺、葉の長さ尺餘にして廣さ三四寸に及ぶ、冬は枯れ朽ち、春に至りて芽を生じ、秋に深紅色の花穂を着く、觀賞するに足れり、實は黒くして硬し、珠數とすべし、元と西南の外國種なるにより甚だ寒を忌む

軒 近き 岩 梨 折る な 猿 の 足 千 那

岩梨は、灌木にして高山に生ず、實は南天に似て秋赤く熟し、其味酸し、一名こけも、又おやまりんごとも云ふ

みそ萩の 袂にかゝる 涙哉 嵐 雪

みそ萩や身にかゝらざる 露もなし 曉 臺

みそ萩は、鼠尾草とも書し又溝萩とも書す、莖に四稜あり、葉は柳に似て夏秋の頃穂を出し、紅紫色の小花を着く

畑から 投出されけり 相撲草 左 逸

相撲草(すまうとり草)は、莖の異名なり、花梗の曲りたる局部を交互に引懸けて兩方に引張り、其折るゝを以て勝負とし、兒童の翫ぶものなり

ぬなは生ふ池の水かさや春の雨 蕪 村

子規鳴くやぬなはの薄加減 曉 臺

ぬなはは、蓴菜(ちゆんさい)のことにて、概ね古き沼澤中に生ず、
莖に透明なる粘液を附着す、食膳の用に充つ、扱之をぬなはと云ふ
ば、其莖蜿蜒として沼に引はへたる繩の如くなるにより、沼繩の語
を約めたるに因ると云ひ、或は滑める繩と云ふを約めたりとの説も
あり

野菊折いくちは袖に翻れけり 北枝

茸狩やいくちも兒は嬉し顔 利合

いぐちは、有毒菌の一種なり、黄蘗とも書す

初霜や小笹か下のるびかつら 惟然

秋深く見ゆる垣根やるびかつら 曳月

るびかつらは、紫葛と書す、全體葡萄に似て蝦の髭の如きものある
より此名あり、其實は葡萄よりも小なり、之を野葡萄と云ふ、或は

實を結ばざるもあり(るびはえびの誤ならん)

虫はみの末摘む花やむかし雛 蓼太

するつむ花は、紅の花のことにて、其花は概ね末の方より摘み取り
て紅を作るに因り斯く云ふ

燕來て罨釣草の萌ゆるなり 護物

野に伏さば罨釣草も頼むへし 一茶

罨釣草は、夏の初め田の畔などに生ず、其莖は三角状をなせり、兒
童は之を引裂き、蚊帳の形を作りて翫ぶ、故に此名あり

百景や杉の木の間の色見草 芭蕉

色見草は櫻の異名なり

畑打つ音やあらしのさくら麻 芭蕉

さくら麻は、春植る麻にて、櫻の咲くころに芽を出すゆゑに此名あり

鼓子花の短夜眠る晝寢哉 芭蕉

鼓子花は、ひるかほ(晝顔)のことなり、其花の形ちいかにも鼓に似たるより、斯る文字を擬當せしものならん

緑豆の頭も白し桃の眉 其角

緑豆は、やへなりと訓む即ち豆類の一種にて、夏から秋にかけ次ぎ次ぎに熟して實を結ぶ、ゆゑに八重生りの名あり、實の色の緑なるより緑豆と書す、或は文豆又はまさめとも云ふ

黄蜀葵汲む音なしの瀧や夏木立 蕪村

黄蜀葵はとろろと訓む、其根は粘液多きにより、打ち碎きて水に浸し、紙を漉く糊として用ゆ、此句は其汁液を汲む場合を云へるなり

野の末やかりき畑を出づる月 鬼貫
かりき(刈葱)は、ねぎの一種にて葉の細きものなり、夏に刈り取て

食用とす、一にかれぎとも云ふ、夏葱のことなり

散る時もあれはこそあれ二十日草 芭蕉

二十日草は牡丹の異名なり、其由来は白樂天の詩に「花開花落二十日」とあり、又藤原道忠の歌に「咲きしより散りはつるまで見し程に花のもとにて二十日経にけり」とあるに因れるならん

高低の頼桐並んで咲にけり 三くわ

頼桐は、一に緋桐とも書す、暖地に産する桐の一種にて、高さ二三尺、葉圓く末尖りて縁に鋸齒あり、夏に長き穂を出し、更に小枝を分岐して、枝毎に朱色の花を着く甚だ美なり、一名唐桐とも云ふ

蜜蜂やびなんかつらの裏葉から 奇北

びなんかつら(美男蔓)はさねかつら(五味子)に同じ、蔓草の一種にて、高木にからみ付きて生長す、冬も葉凋まず、夏の初め白黄色の

蓮の如き花を開き、豆の如き實相聚まりて莖の先に着く○又さねかつらの名は、枕詞として用ゆ、即ち其蔓長くして末の方は這ひ合ふものなるより、後ちも逢ふにかけて用ゆ、古歌に――さねかつらのも逢はむといめのみを云々――とあり、又其蔓をたぐり取るものなるより、くるにかけて云ふ――初雁の山飛びこゆるさねかつらくる秋しるき秋風ぞ吹く――と云へる類なり

○附 記

妻木とる内侍の尼の時雨哉

召 波

妻木は、一に爪木とも書す、爪折りて焚きものにする木の枝のことたきゝの古語なり、後撰集に――山里につまぎこるへき宿もとめてむ――とあり

時雨るゝや黒木積む家の窓明り

凡 兆

黒木とは皮を削らぬまゝの木を云ふ、又京都の八瀬大原などの婦女子は、木の長さを一尺程に切り、之を蒸して黒色を帯ばしめ、京に賣りありくもあり、之を黒木賣と云ふ

大原木に結びつけたる蕨哉

吏 缸

大原木とは、大原あたりより京に賣りに出づるものにて、前に解したる黒木と異名同物なり

春風や家はとぎれてあらゝ松

保 吉

あらゝ松原とは、荒々としたる、即ち疎らなる松原のことなり

朔日や八束穂かけし星の神

蘭 更

綱引や去年の八束穂繰り合せ

蓼 太

八束穂とは長き稻穂を云ふ、蓋し八束(やつか)とは、凡て物の長さを形容する詞なり

第五門 名所、旧迹

菊河に公家衆泊けり天の川 蕪村

菊河の里は、遠州金谷村大字菊川の舊稱にして、昔は東海道中最も繁華なる驛なりしと云ふ、承久三年中納言宗行卿、罪を得て東下の時、此の驛に一泊し旅館の障子に……昔南陽縣之菊水、汲下流延齡、今東海道之菊水、宿西岸亡命……との語を書して、世の同情を惹きしこと人口に膾炙す

今宮の煤掃まばし時鳥 召波
今宮は虫ところなり聾なり 來山

今宮は山城國愛宕郡大宮村に屬し、今宮神社の所在地にして、其境内頗る廣く老樹蒼苔いと滋りて神寂びたり、該社の例祭たるやすら

い祭は、疫神を追拂ふさまに摸したるものにて世に名高し。又今宮の戎と云ふは攝津國にあり、即ち大阪難波新地より住吉に到る街道に當れり、境内別に風致なきも、毎月十日には賽者群を爲す、特に一月十日には南地五花街より、寶惠籠ほえかごに乗りて妓の詣づる者多し、當日此社に賽すれば、一年の福を享くると云ふに因る

螢火や黒津の梢兒の鳥 去來
曉は黒津へ還る螢哉 尙白

黒津は近江國栗太郡にあり、瀬田の橋より南一里許なり、此地は水石の奇勝多きと、湖山の要害とを以て古より其名著はる

八橋や田はかりありて鳴く蛙 許六
里人よ八橋つくれ春の水 蕪村
八つ橋は、參河國碧海郡駒場村にある名所にして、多くの橋を架し

杜若を栽植せしを以て名あり、業平東下の時、杜若の美を詠じたるは即ち此地なり

矢橋 乗る嫁よ娘よ春の風 太 祇

葉月や矢橋に渡る人よめん 千 子

矢橋は、近江八景の一つにて琵琶湖の東岸にあり、大津通ひの渡船に、よく旅人の乗る所である

牧方や遊女も交る麥の秋 沙 長

牧方は、河内國茨田郡淀川の東岸の一市驛にして戸數四百許、昔しは名に聞えたる牧場にして、名馬生月いけつきを出し、も此處なり

池田から炭くれし春の寒哉 蕪 村

池田は攝津の國にあり、炭の産地を以て名あり

鶯や生麥村の四つ下り 非 風

生麥村は、武藏國桶樹郡にあり、文久二年の春薩摩の藩士、英國人の無禮を憤り此地にて斬殺し、終に國際問題を惹き起し、ことあり

馬借りて竹田の里や行く時雨 乙 洲

竹田村は山城國紀伊郡にあり、即ち京都より伏見に至る伏見街道の南端にて、伏見の町に近き邊りを云ふ

照り返す伏見の方や桃の花 太 祇

百合あまた束ねて涼し伏見舟 召 波

咲散もいさ白梅の伏見人 几 董

伏見は京都の南方に當れる一都邑なり、此地初めは深草野と稱し、渺茫たる荒原にして、只一二の小村落あるに過ぎざりしが、豊太閣此地の桃山に城櫓を築きしより、漸く繁華の緒を開きしなり

橋わたす銚さしはやせ粟田口 太 祇

鴛鴦を飼ひぬ栗田の七寶師 四 明

栗田口は京都市三條白川橋の東より山際に至るまでを云ふ、即ち東國より京に入る口なり、昔時藤原良相の山莊を設けし所にして、栗田焼、栗田の七寶など世に名あり、就中、栗田焼は能く火氣に耐ふるの特質ありと云へるのみならず、之に盛るに毒藥若くは惡乳を以てする時は、其茶碗の裂目忽ちに黒色又は黄色を現はすものとして其名を知られたり、又栗田口の神祭は九月十五日なり

たゝ一夜桃に宿がる木幡哉 芭蕉
馬はあれと牛や木幡の星迎 也 有

木幡こはたは山城國紀伊郡にあり、往時の大和街道にして關所を設けありしと云ふ、昔し此里には馬貸すもの多くありしより、歌句に詠みたるもの少からず

醍醐出て二度にもらひぬ梅二本 召 波
うら枯や家をめぐりて醍醐道 蕪 村

醍醐は山城國宇治郡に屬し、上醍醐下醍醐の別あり、此地にある醍醐寺は延喜朝の創立にして、其後豊太閤の再建により、殿樓高閣の壯美、林泉の奇勝、大に觀るべきもの多し、其山上は老松巨杉鬱蒼として、幽邃の趣特に掬すべきものあり

古猫や眞葛か原に春の聲 三津人
玉巻くや風も騒がぬ眞葛原 之 仲

眞葛ヶ原は京都市内に於ける大谷圓山邊の總稱なり、此地昔しは山野なりしも、近世に至り多くは寺院の地域となり公園となり、全く熱鬧の域に變せり

又平に逢ふや御室の花盛 蕪 村

早梅や御室の里の賣屋敷 同

春は花の御室の兒や辻か花 間山

御室は京都府葛野郡花園村にあり、此地は古來櫻花の名所にして、其花は普通のものとは異なり、即ち樹は高く伸はす、枝を四方に横出するを以て一層の風致あり

重なりて八坂を下る口傘哉 失名

八坂は京都市祇園新地の東端にて東山の麓の邊りを云ふ、此地に官幣中社たる八阪神社あり、京都の祇園會として著名なるは即ち此社の祭禮なり

笠島やいつこ五月のぬかり道 芭蕉

旅人よ笠島語れ雨の月 蕪村

笠島は陸奥國名取郡にあり、中將實方朝臣の墳墓存在する爲に名高

し、實方は和歌に堪能の人なりしも、殿中にも行成と口論し其冠を笏にて打落し、を主上見そなはし、歌枕見て參れとて、陸奥守に任じ給ひしが、終に其地に客死せしなり、されば西行法師も實方の塚にて……朽もせぬ其名はかりをとめ置て枯野の芒かたみとそ見る……と詠せしなり

さは姫や真々の繼橋絶えたれど 道彦

真々の繼橋は、下總國東葛飾郡市川町大字真間なる弘明寺の下にあり、古は兩岸より板を架して橋としたるゆる繼橋の名あり、古歌多し

旅人や會我の里訪ふ五月雨 太祇

會我中村は相州國府津の北凡そ一里餘にして、下會我村の内に屬す近傍に會我山、會我原、會我岸などの字を存す、會我兄弟の出生地

にして、曾我一家に關する古跡多し

駕ついで秋の日脚を石部まで

船山

酒淡き石部泊りや春寒し

青嵐

石部は近江國甲賀郡にあり、昔は東海道の一驛にして、草津を去る凡二里、昔より名所の一に數へられて古歌多し

葛飾の蚊に寝かねつゝ椎の月

成美

葛飾や早乙女がちの渡し舟

一茶

葛飾は郡として武藏下總の兩國に跨り、村として下總國東葛飾郡に屬す、故に葛飾の名は東京市東北に隣接したる田園趣味の一斑を指稱するものと解して可なり

雨にこもる玉水の宿の蝸牛

蕪村

玉水の里は大和街道の一驛にして、京都を去る凡そ七里許、此地を

玉水と稱するは、著名なる井手の玉水の所在地なるに因る、即ち市街の北端なる街道脇にある井水にして、往來の人之を掬ひ飲む、玉水とは譽めたゝえたる稱なり

山吹や井手を流るゝ鉋屑

蕪村

星うつる井手に水なし綿の花

大江丸

井手の里は前記玉水の里の邊りにして、六玉川の一たる玉川の流れるある地なり(玉川の事は第七門に詳なり)、井手の蛙とし云へば彼の鴨長明が物哀れる聲と聞にし歌によりて著名なりしも、今は玉川の迹盡きて蛙の聲も聞くことなし

鶯や國栖の翁の笛の弟子

貞室

椿咲く花のゆかりや國栖の里

鳥波

國栖の里は吉野山中の一部なり、應神天皇吉野の宮へ行幸の時、此

里人來りて醴酒を獻じ樂を奏せしことあり、國栖の奏として往昔禁廷の年の始めに、笛を吹き歌を謠ふの儀式ありしは之に基くとぞ

なつかしき津守の里や田螺あへ 蕪村

津守の里は攝津の國にあり、萬葉集このかた幾多の歌人に詠まれたる名所なり

綿くりや十市の里の夕つく夜 秋 篤

十市は大和國の中央に位する郡名にして、著名なる香具山を始めとし、音羽、多武峰等郡内に崛起す

星崎の闇を見よとや鳴千鳥 芭蕉

深閑と星崎寒し草枕 舍羅

星崎の里は尾張國愛知郡にあり

水鶏啼くと人のいへばや佐谷泊 芭蕉

佐谷は一に佐屋と書す、尾張國海東郡にある驛邑なり

鶯や桂の里に暮るゝまで 鳥角

初午や淀も桂も人の聲 關更

桂は山城國葛野郡に屬し、大堰川の下流桂川の西にあり、京都より丹波龜山に通ずる地にして、現今は桂離宮を置かれたり○淀は山城の一都邑にて、京都より四里弱の距離にあり、此地は淀川、桂川、巨椋の池水の會流して、水勢の淀み湛ふるより此名あり

神迎水口立ちか馬の鈴 珍碩

水口は近江國甲賀郡にあり、元加藤氏の領分にして東海道の一驛たり、藤蔓にて作りたる文庫、笠、煙艸入等の製品を出す、水口細工と稱するもの是なり

涼しさを畫に移しけり嵯峨の竹 芭蕉

餘花に往く嵯峨まだ寒し一ツ酒
 木ねり柿嵯峨は浮世を知らぬなり
 落ゆくやこゝは浮世の嵯峨の鮎
 北嵯峨や町うち越して鹿の聲
 嵯峨までは見事歩みぬ花盛
 今はとて嵯峨へ捨るや落し水
 花に來て佗ひよ嵯峨野の艸の餅
 花に對して嵯峨の裏山なつかしき
 嵯峨も今酒賣る軒の釣葱
 暮れ行や麻に隠るゝ嵯峨の町
 西東いつれ嵯峨野の虫合
 下嵯峨へ一すじ道の野菊哉
 言 來 重 丈 荷 蕪 几 月 閑 曉 東 布
 水 山 頼 草 兮 村 董 居 更 臺 湖 旦

いざ登れ嵯峨の鮎喰に都鳥
 夕暮の嵯峨になりたる若葉哉
 嵯峨にさへ止まらぬ秋の行衛哉
 葉竹賣嵯峨野の嵐音すなり
 下萌や丸太轉はす嵯峨の町
 今朝の秋先つ北嵯峨へ使せん
 冬川や夕日に並ふ嵯峨の家
 螢飛ふ嵐山の松嵯峨の竹
 嵯峨は京都府葛野郡に屬す、嵯峨帝此地に離宮を置きたまひしによ
 り、爾來縉紳富豪の別莊を設くること多く、洛西の勝地として第一
 に指を屈する處となれり、且此の邊りには有名なる三尾（高尾、榎
 尾、横尾）の勝景を始めとし、嵐山の佳景ありて林泉の觀賞すべき

もの多し○嵯峨の何地たるを解釋するには、前に列記する如く多數の句を要せざれども、古今の俳人が句作の資料として如何に此地を利用せしかをうかがひ、併せて各自の着想に關する異同をも示さんとて、煩を忍びて數十句を擧げしなり

黒谷の初夜きく月の野川哉

几、董

黒谷や木魚たゞけは風薫る

甲、山

黒谷は京都眞如堂の北二三丁にあり、一に紫雲山とも稱す、淨土宗の寺院あり、元來は叡山西塔の黒谷に摸したるがゆる、初めは新黒谷と稱せしも、後には單に黒谷と呼ぶに至れり、境内は凡て自然の山林に據れるがゆる、樹深く苔滑かにして殆ど幽谷に入るの感あり比叡の深壑に摸したりと云ふも無理ならず

臘八や八瀬の薪と山を出る

麥、林

傘借て八瀬の里へと時雨けり

虚、子

八瀬は京都府愛宕郡にあり、京都より凡そ二里半許にして叡山の麓に當れり、大原の里と同じく薪賣る女を出す(大原女のこととは第二門に詳なり)

むら時雨三輪の近道尋ねけり

其、角

三輪の田に頭巾着て居る案山子哉

蕪、村

三輪町は大和國式上郡にあり、奈良より凡五里、戸數四五百なるも市街の茶店概ね三輪の茶屋と云へる招牌を掲ぐ、蓋し俗曲梅川忠兵衛の院本に因るもの歟

落葉さへ紅葉の山の高雄哉

樽、良

高雄は山城國にあり、即ち高尾、栴尾、檜尾の三尾と稱して紅葉を以て名著はる、特に高雄は楓樹最も多し、此山に存せる神護寺は和氣清麿の創建にして、文覺法師の住せるも此坊なり

御遷宮、夢の浮橋いで懸ん 旨原

短夜や夢の浮橋踏みはづし 蘭女

夢の浮橋は一に大路橋とも云ふ、京都市今熊野町にありて、泉涌寺道に當れり、橋の名は源氏物語にも出でしものにて名高し、蓋し無常所の通路たる義なり、一説には、近所に鳥部野の墓地ある故に此名ありとも云ふ、其水流は泉涌寺の後山より出て西鴨川に入れり

名月や朱雀野の鬼たえて出す 几董

朱雀野に人待つ顔や白董 梧十

朱雀村は京都府葛野郡にあり、嵯峨帝宇多帝などの宮址あり

岡崎は祭も過ぬ葉鶏頭 史邦

岡崎は京都市の上京區にあり、即ち黒谷の表門前に當れる町にて、岡崎神社あり又岡崎別院あり

深草の土くれぬすむ燕哉 燕村

深草の鶉ともならで墓の聲 曉臺

深草は京都稻荷神社の南方墨染の近傍に至るまでを云ふ、昔しは鶉の名所なりしも、今は鶉の床さへ刈り盡されて無し

墨染の名に葉櫻の曇哉 蘭里

墨染は京都藤の森の南方にあり、此地に墨染寺と云ふあり、寺内に名高き墨染櫻あるに因る

若竹や橋本の遊女ありやなし 燕村

橋本は山城河内の國境にて、淀河を隔て、山崎と相對する處にあり、往昔山崎の大渡しに架けたる橋ありしを以て橋本の名あり、今は橋なくして只上下の渡しあるのみ、京阪の街道に沿へる一小驛にて、今も昔の驛女郎屋ありて藪多し

藪入や氣も長岡の里心 山父

長岡とは古へ山城國大原野神社の東南より、山崎の東北に至るまで、此邊一帯を稱したるもの、如し、近年に至り其故蹟を査定して長岡都址の一大石碑を建設せり、此邊の土中より往々古瓦を發掘することあり、往古太極殿の迹なりとも云ふ

鶴 初日千代の古道金砂子 鳴雪

千代の古道は山城國葛野郡にあり、古歌に——嗟峨の山御幸絶えにしせり川の千代の古道あとはありけり——と見ゆ

寒聲は女なりけり戻り橋 鳴雪

戻橋は京都著名の橋の一つにて一條通堀川に架す、昔し三善清行疾にかゝりし時、其子熊野に在り、急ぎ京に歸りしも父既に歿して、此橋上にて葬送に逢ふ、其子乃ち靈柩を橋上に留めて専念祈念せし

に父蘇生して偕に家に還れり、因て戻り橋と名づくると云へり、現今婚姻の途次此橋を過るを忌むは、離縁を嫌ふの意に出づ、又旅行の人を此處に送るは、其早く歸るを希ふの情に出づ

五月雨や美豆の寢覺の小家勝 蕪村

美豆は淀の東南十丁許にある村の名にて、昔天子の御馬を此地に放養し、美豆の御牧と云へり、古歌などにも之を詠じたるもの多し

鉢叩右京左京の行戻り 召波

耕や昔右京の土の艶 太祇

桓武帝の京都に奠都したまひし時は、京を二域に分ちて右京左京と命名し、其規模宏大なりしも、其後王室の式微と共に、右京の方面は漸く廢れて田園となれり、現今の京都市は左京の地にして、西山の麓に至るまで西郊一帯の地が右京たりしなり

蹇の 三熊詣や 蝸牛

蕪村

寒梅や 御熊野行けは 道に咲く

化羊

三熊、御熊ともにみくまと訓み、紀伊の熊野權現の所在地を云ふ、みくまのみは言語を云ひ出てんとする時、其語頭に添ゆる發聲にして他の助語の如く意味を有するにあらず、又下の語に何等の影響をも與へず、只下の語氣を強め語調を助けんが爲に用ひしなり、猶ほ吉野をみよしのと云ふが如し、蓋し初めは和歌の調などを助けん爲に起りしなるべけれど、今は全く一種の通語となれり

鶯や 笠縫の 里の 里は つれ

蕪村

笠縫は大和國の名所にして、伊勢大廟を置かるゝ前までは、此地に天照大神を奉祀したりと云ふ

信樂や 茶山しに ゆく 夫婦連

正秀

信樂や 尉か 家督の 山いちご

千那

信樂や 茶山見しより 引く 小鳥

道彦

信樂は近江國甲賀郡にあり、古書は紫香樂とも書せり、聖武帝の離宮を起し玉へるより名著はる、中世には牧場ともなり、又久しき昔より茶を栽培せしを以て世に知らる、製茶の外に信樂焼と云へる陶器をも出せり

身に入むや 横川の 衣をすます時

蕪村

初雪や 横川の 杉の 三分一

千那

宵の 雲 横川の 杉に 時雨けり

虚子

横川は比叡山にあり、東塔、西塔、横川は比叡の三塔として世に知らる、横川の中堂なる楞嚴院は慈覺大師の開く所なり

提灯に 蹴上げの 泥や 駒迎

素堂

蹴上は京都三條の東にて大津街道へ通する處に當れり、今は疏水運河の船乗場の設あり（一説に此の句中の蹴上は地名を指したるにあらず、迎へ駒の勇しく堤灯に泥土を蹴上げたるを云ひしなりと云々暫く疑を存して茲に併せ記す）

寒食に火くれぬ加茂を我や行く

太 祇

加茂の町樂も聞えず秋の暮

几 董

加茂は山城國愛宕郡にあり、上加茂村下鴨村に分ちたれども、普通は總稱して單に加茂と云ふ

撞木町鶯西へ飛び去りぬ

燕 村

菜の花や裏から這入る撞木町

何 程

撞木町しゆくまは京都墨染の近傍にある狭斜の巷名なり

花木榿北 岩倉の一番戸

船 山

岩倉は山城國愛宕郡にあり、初めは岩藏と書し又石藏或は石座と書せしもあり、是は桓武天皇奠都の際、詔して王城の四方に石藏を設け、其中に經文を納め玉ひしに因るものにて、此地も亦其一たりしなり、今尚竹林中に經墳あり、傳へ云ふ經文を納めし處なりと

小野に參る業 平 卿や春の雪

菊 寸

小野は山城國大原の里に屬する所にて、東方に峙てるは小野山なり藤原明衡がニ勝形奇秀甲ニ于天下ニ之地翠嶺紅林更留ニ綾錦山之秋ニとまで嘆稱したる好風光の地にして、古來より紀貫之を始とし縉紳文客の別莊を營み、花月を樂みたること多し

木下 闇みな黄蘗の法師ばら

露 月

黄蘗は山城國木幡の南方に在り、此地に萬福寺ありて黄蘗山と號す承應年間に明の國より隱元禪師來朝し、官命によりて創立せしがゆ

る、其結構凡て明代の制に倣ひたり、因て一たび此の境内に入れば
異域に在るの思あり

蒲公英や壬生の小村は是よりそ 米子

壬生の里は山城國葛野郡大内村の一字たり、此の地に壬生寺ありて
壬生狂言を執行するにより世に知らる(壬生狂言のことは第十
二門第四類に詳なり)

紫野赤大根も作るげな 一寸

紫野は山城國愛宕郡大宮村に屬す、臨濟宗の大本山たる大徳寺ある
を以て名あり

▲支那の部

瀟湘の雁の涙や朧月 蕪村

瀟湘は支那にて有名なる洞庭湖に注げる川を云ふ、瀟湘八景と云へ
ば我國の近近八景に於けるが如く其名世に著し、又瀟湘の雁と云ふ

のは、瀟湘何事等閑回、水碧沙明兩岸苔、二十五弦彈夜月、不勝清
怨却飛來と云へる有名の詩に因るなり

易水に葱流るゝ寒哉 蕪村

易水は、壯士荆軻なる者、燕の太子丹の依頼を受け、秦の始皇を刺
さんとして出立するに際し、別離の宴を張りし處の地名なり、風蕭々
兮易水寒、壯士一去不復還云々の悲歌を以て知らる

滄浪の水清めらは葱を洗ふべし 子規

滄浪は漢水の下流なり、楚の屈原が漁父の辭に、滄浪之水清兮可
以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足と云へる句あり

初鶏や函谷關の燧石 泊雲

函谷關は秦の要害たる關門の名なり、孟嘗君が秦の囚はれを遁れて
此の關門にかゝりし時、鶏鳴を聽かされは關門を開かぬ國法に制せ

られ、後方よりは秦の追手に追ひ付かれ、進退窮まりしに、孟嘗君の幕下に鶏鳴の真似を爲す者あり、之に因りて他の真正の鶏も次第に鳴き出て、爲に關門開けて脱出するを得たり

いざさらば蚊遣逃れん虎溪まで

燕村

虎溪は廬山の入口に在る地名なり、昔し晉の惠遠禪師が此處に隠れて、虎溪以外に出てすと揚言し居たりしを、陶淵明と陸修靜の二人尋ね來りし際、禪師は其歸るを送り、談笑しながら興に乘し、終に橋を超えて虎溪を過ぎしかば、淵明は禪師が禁足の自戒を破りしとて三人手を拍ちて笑ひたり、之を虎溪の三笑と云ふ、我國には美濃國土岐郡に虎溪をうつしたる一禪域あり

大根の花や虞芮の譲り合ふ 石雨

虞と芮とは周の國に屬せし地名なり、或る時虞の民と芮の民と其地

界を争ふて久しく解けず、之を周王に訴へんとて出發せしが、周の國內に入るに及ひて、周の民は皆禮讓に厚く、行人は其路を譲り、農夫は其畔を譲るの美風あるを見て大に耻ぢ、終に其争を止め、訴へずして歸村せしと云ふ

章臺や飯蛸見えて嬉しけれ 青々

章臺や柳枝一鞭春惜む 青嵐

章臺は支那の都たりし長安にある遊廓の名にして、柳など多く植えたる地なりしと云ふ、少年行の詩に——遺却珊瑚鞭、白馬驕不行、章臺折楊柳、春日路傍情——とあり

燕趙の人は石竹くねりなき 青々

燕趙とは、戰國の世に於ける列國の名にて、燕や趙の地には慷慨悲歌の士多くして、然諾を重んじ義侠を好むの習俗に富めり、壯士中

の壯士たる荆軻の如きも燕より出でしなり

邯鄲の市に鯁見る雪の朝

燕村

菜の花やかへり見すれば邯鄲里

曉臺

邯鄲は前に記したる趙の國の都にして、邯鄲の少年など云へば、意氣の甚だ豪なるを以て聞えしこと、宛も我國に於ける江戸ツ子氣質に髣髴たるべし

臨邛に桔梗を摘んで歸りけり

青々

臨邛は支那の成都にある地名にて、此處に卓王孫と云へる富豪あり其娘の卓文君と云へるが司馬相如に懸想せし逸話は、支那人物の部司馬相如の解に記せり孟郊の詩に——欲別牽郎衣、郎今到何處——不恨歸來遲、莫向臨邛去——とあり

五湖の水あたりに白き尾花哉

青々

鮮桶に五湖の鮒とぞ題しける

紅緑

五湖は、支那の勝地たる洞庭湖を云ふ、唐詩に——落日五湖遊、烟波處々愁——とあり

冬の月廬山の鐘も聞ゆなり

素郷

一夜鮮廬山を横に眺めけり

青々

廬山は支那の勝域にして、東西に當りて香爐峰あり、西南に石門山あり、壁立千仞飛泉冲天の仙境なりと云ふ、初め周の威王の時匡裕生れながらにして神靈なり、因て此山に廬を結び栖む、世に之を廬君と稱し、より、其山を廬山と呼ぶに至りしとぞ、白氏文集に——遺愛寺鐘歇枕聽、香爐峰雪寒簾看——の句あり

子子の水や長沙の裏借屋

蕪村

長沙は楊子江付近の潭州にあり、漢の孝文帝の時、賈誼貶せられて

長沙王の大傅となり、長沙の賦を作りて其不幸を述べしとの故事ある地なり(但し句の意は支那の地名を借りて我々の或る都會の陋巷に擬したるなり)

桃源の岸に流るゝ毛蟲哉 召波

桃源の流に赤き椿哉 泊雲

陶淵明の桃花源記に——晉の太元中、武陵の人、魚を捕へて業となし、溪に沿ひて行く、忽ちに桃花林に入る、林盡きて水源に一山あり、山に小口あり、入ること數十歩にして、開朗の域に出づ、其地の男女怡然として自ら樂む、漁人の來るを見て大に驚き、且云ふ、我が先世、秦の亂を避け此に來りて世と絶つ云々と、漁人辭し歸りて、國守に之を告ぐ、國守、人を遣はして其地を求めたれど、終に迷ひて路を得ず——とあり、是より理想的の仙境に擬して、武陵桃源の語を用ふるに至れり、韓退之が桃源の詩の末句に——世俗寧知

偽與眞。至_レ今傳者武陵人——とあり

楊州の津も見え初めて雲の峰 蕪村

登らんせ春は楊州第一樓 露月

楊州は支那長安の附近にあり、妓樓旗亭に富みたる繁華の地なりと云ふ

支那扇蘇州の少婦慕はしき 作市

蘇州は今の天津上海の間にある狹斜の地にして、楊州と同じく、絲竹歌吹の巷として名あり

萍の花や洞庭八百里 嘯山

洞庭は支那楊子江の水源にして、洞庭八湖と云ふは、支那にて屈指の勝景とせり

相如病む茂陵の雨や卯酒 一簑

茂陵とは司馬相如(相如の事は第一門支那人物の部に詳なり)が病身の爲に官を免せられ、其妻の卓文君と共に閑居せし所の地名なり、李商隱が詩に休問梁園舊賓客。茂陵秋雨病相如とあり

大根の花や五陵に出商ひ 青々

五陵とは、支那の長安に漢の高帝、惠帝、景帝、武帝、昭帝の五陵あるを云ふ



第六門 山嶽、丘谷

時鳥啼かぬ夜白し朝熊山 支考

朝熊山あさまやまは伊勢國度會郡の中央に位す、直立二千尺許にして、尾參遠地方の内海及び富士を遠望し、風光佳絶なるを以て名あり

日の午時も杉の霞や鞍馬山 素粒

鞍馬山は、京都の北位にある名山にて、三條大橋を去る凡三里、天武帝嘗て大友皇子と戦ひ敗れて、此山麓に鞍馬を繋ぎ玉ひしに因り此名あり、山中老杉亭々として夏尙寒し、山上に一寺あり鞍馬寺と云ふ、牛若丸が天狗に劔道を學びしとの俗説ありて世に知らる

短夜や葛城山の朝曇 蕪村

葛城山は河内國にあり、此地神武帝の御宇に土蜘蛛と稱するあり、

身短く手足長くして侏儒に似たり、官軍葛の網かつらを作りて之を掩襲し、漸く殺戮するを得たり、因て葛城山と名つく、此山中には奇岩多く、岩橋の如き最も奇にして、金剛山と並び稱せらるゝ山なり

木綿とる雨雲たちぬ生駒山

其角

江の蛙生駒の雲のかゝるなり

召波

角豆とる籬のそなたや生駒山

几董

生駒山は河内大和兩國に跨れり、山勢は寛にして險ならずと雖も、山中に巨石大樹多し、此山は大阪より正東に當りて指目し易し、昔は伊駒と書せり

伊勢は照る馬士の鈴鹿や花曇

許六

月かすむそなたや鈴鹿坂の下

定雅

夕立の鬼も降るかと鈴鹿山

子規

鈴鹿山は伊勢の鈴鹿郡にあり、俗に八百八谷と云ひ坂路峻峻にして往時は東海道中第二の峻嶺とし、日本三關（近江の逢坂、美濃の不破と共に）の一たり、田村將軍が鬼退治傳説のあるも此山なり

五月雨や胸につかえる秩父山

一茶

秩父山は武藏國秩父郡にあり、武甲山の別稱なり

羽の子や落ち來る空に筑波山

蓼太

筑波山は常陸國筑波郡にある高山にて、陰陽の兩峰相對峙す、即ち西なるを男體山、東なるを女體山と云ふ

俱利伽羅や三度起ても落し水

桃青

俱利伽羅の雪やなだれん歸る雁

鳴雪

俱利伽羅峠は加賀國河北郡にあり、有名の峻坂にして木曾義仲が火牛の謀を以て平氏の大軍を塵にしたる處なり

鮎汲や喜撰か嶽に雲かゝる 几 董

喜撰ヶ嶽は一名宇治山とも云ふ、京都府宇治郡の東部にあり、山上には岩窟あり喜撰か洞と稱す、是れ喜撰法師が雲に乗じて昇天せし舊迹なりと云ひ傳へり

武庫山や沙摩の海に雉の聲 兎 湖

武庫山むこやまは一名六甲山とも云ふ、攝津國武庫郡の北境に位し直立三千丈許あり、一名ゆづりは嶽(樸葉嶽)と云ふは、山中に樸葉多きに因る

山駕の淺香も過ぬ青嵐 乙 二

淺香は阿阪とも書す、伊勢國一志郡阿阪村にあり、一名袖岡山とも云ひ、古來多くの古歌に詠まれて名高し、且山中に櫻楓多くして、春秋の觀望に佳なり

新月やいつを昔の男山 其 角

藪入やぶいりや鳩とよをめてつゝ男山 蕪 村
男山は一をとこやまに雄徳山と書し、又八幡山と云ひ、或は香爐山とも記するあり、京都府綴喜郡の西北にあり、京都より南方凡そ四里、山上に男山神社あり、石清水正八幡宮是なり、宇治、桂、淀、木津の四河流、此の山下を環流し、京攝の諸山一眸の中にあり、眺望絶佳にして山中に名勝古迹多し

早 蕨 や 笠 取 山 の 柱 賣 正 秀

笠取山は山城と近江との國境にありて、醍醐の東に當れり、これより東方一里許にして近江の石山寺に到るべし

六月や峰に雲置く嵐山 芭 蕉
嵐山松の四月となりけり 白 居